



刀剣が語る 古墳時代の幕開け

鉄製武器の導入から前方後円墳の成立

講演録

- 本書は、古代歴史文化協議会が主催した第5回古代歴史文化講演会の講演録です。
- 講演会は明治大学で一般公開での開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大のため、無観客にて開催し、動画をインターネット上に公開する方法をとりました。
- 講演会の撮影は令和3年12月15日、岡山県立美術館ホールで行いました。

👉 動画の視聴はこちらから 👈



<https://kodairekibunkyo.jp/>

または

古代歴史文化協議会

検索



表紙 (左)：鳥取県中尾遺跡出土鉄矛 (倉吉市教育委員会提供)
(右)：石川県白江梯川遺跡出土木製剣把 (財団法人石川県埋蔵文化財センター)

開会あいさつ

【司会：宮地】 ただいまより第5回古代歴史文化講演会「刀剣が語る古墳時代の幕開け～鉄製武器の導入から前方後円墳の成立～」を開催いたします。今回は、新型コロナウイルス感染症予防の観点から岡山県立美術館を会場にオンラインでの配信とさせていただきます。開会にあたり古代歴史文化協議会を代表して、奈良県文化・教育・くらし創造部文化資源活用課長 中川智巨よりご挨拶申し上げます。

【中川】 みなさま古代歴史文化講演会「刀剣が語る古墳時代の幕開け」をご視聴いただき誠にありがとうございます。この講演会を主催いたします古代歴史文化協議会は14の県が力を合わせて調査研究を行うために7年前に結成されました。個々の地域的研究だけではわかりにくかった日本の大きな歴史の流れを解明することを目標として共同研究を行っており、その成果はこれまで展覧会や書籍の公開を通して、広く発信をまいりました。今日の講演会は現在進めている古墳時代の刀剣に関する共同調査研究の中間発表として行うものでございます。新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン配信のみという新しいスタイルで開催させていただきましたが、この動画を通じて、共同研究に参画されている14県の県民の皆様はもちろんのこと、全国の歴史ファン、古代史ファンの皆様にも日本列島各地の豊かな歴史文化の魅力を感じていただければ幸いです。以上14の県からなる協議会を代表いたしまして、主催者の挨拶とさせていただきます。どうか刀剣が物語るダイナミックな歴史像を最後までごゆっくりお楽しみください。



【宮地】 それでは、基調講演に入ります。基調講演は石川日出志先生による広域交流の重層性1～3世紀の東アジア・日本列島です。それでは石川先生ご登壇ください。

石川日出志先生は明治大学教授で日本考古学を専門とされております。それではよろしくお願いいたします。

基調講演

「広域交流の重層性—1～3世紀の東アジア・日本列島—」

石川 日出志（明治大学文学部教授）

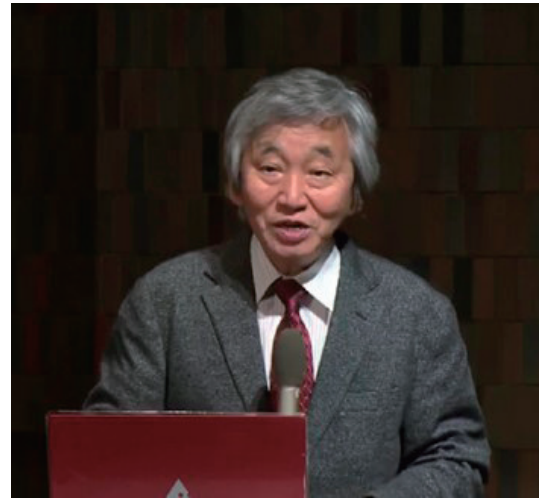
基調講演

はじめに

皆さんこんにちは。ただいま紹介いただきました、明治大学の石川日出志と申します。どうぞよろしくお願い致します。私をよくご存じの方は何でお前が出てくるんだとお思いになる方がいらっしゃるかと思いますが、この古代歴史文化協議会のこうした講演会、議論、シンポジウムの会場として何度か明治大学を使っていた関係で今日も出しゃばってまいりました。私、日本古代学研究所というところの所長をしております、今回共催という形で加えていただいております。それ故に私が講演ということですが、実際にはこの後の議論の前座という性格のお話となりますので、よろしく願いいたします。

私のテーマはちょっとややこしいものとなりました。「広域交流の重層性 1～3世紀の東アジア・日本列島」ですが、実はこの問題は今年から3か年の科学研究費を受けまして研究を始めた、そのテーマを持ってきたということでもあります。璽印=ハンコですね、ガラス、鉄器からみた1～3世紀東アジアと日本列島の広域交流の重層性というテーマです。これは対象とする時代は弥生時代の後期から古墳出現期としています。それから対象資料としては、たくさん議論しなければいけない資料がある中で三つに焦点を絞っています。一つはハンコ、ここ10年ほど、私はハンコの研究をやってまいりました。それをもう少し続けたい。日本にもたくさん資料が所蔵されていますが、中国にもたくさんございます。それらをもう一度考古学的な目で見直したい、さらに研究したい、それが一つ。それからガラスですね。ガラスの蛍光X線分析の研究蓄積がかなり出てきており、アジアを股に掛けた広域にわたるガラスの流れ、流通というのがかなり見えてきましたので、これももうすこしやりたい。それから鉄の、本日メインテーマとなりますけれども鉄の刀剣の東アジアでの普及、日本列島への普及、あるいは流通、副葬、こうした問題も取り上げたい。この三つをどうにかして一つのまとまりあるものとしてつなげたいということで、この広域交流の重層性というテーマを挙げたわけでありまして。

この時代、弥生時代の後期から古墳出現期にかけて、それ以前にもまして日本列島内で活発な地域間交流、しかも隣どうしでなくて、かなり遠隔地とも、かなり直接的な、間接的であっても密な物流・交流が明瞭になってまいります。それがこの後の古墳時代社会形成の大きなベースになります。また、そうしたこの時期の活発な日本列島での地域間交流・流通は何も日本列島内で閉じるものではなくて、朝鮮半島さらにアジア大陸の王権、あるいは技術や経済やそれらと密接に係りあっているわけでありまして、日本列島だけを切り取るわけにはいかないわけです。右側に地域間関係という三角形モデルをつくってありますけれども、この時代、中国の政治動向の影響を受けながら社会の階層化というのが急速に進んでまいります。やがて、だいぶ後になりますが、国家形成というものにつながるベースとなる、社会の組み換えというものが起きてくる。それをピラミッドの形、単純な三角形で描いた場合、従来であればこの時代、分野の考古学研究ですと、青銅の鏡の研究がものすごい蓄積があります。ただし、それよりも上位の国家間、アジアの国家間の様相は、実はハンコ=璽印から描けるわけです。しかし、あまりこれは論じられてきませんでした。それから土器や鉄器に関して、土器は日常生活での交流まで含めてのことになります。日常的なものから、あるいは人の往来=遠隔地の往来に伴



う土器の移動とか、社会のピラミッド構造の下位の部分を描くそうした土器研究というものもかなりの蓄積があります。鉄器も同様であろうと思います。しかしその間に、従来の鏡の研究と土器との間にはやや隙間が何やらあるように思います。ガラス、それから鉄の中でも長物（長い刀剣）を中心に検討していくと、これらが、従来の蓄積ある銅鏡の研究あるいは鉄器・土器研究、それらをつなぎあわせて、そしてこの時代の社会の重層的な、しかしものすごく大きくアジアを股にかけて、大きく時代が転換し社会が移り変わっていく、そういう様子が描けるのではないかという、そういう構想ですね。どこまでできるかわかりませんが、そんなことに取り組んでみたいということでこんなテーマを掲げてみたものであります。

そしてそれからですね、従来のこの研究は、古墳時代社会の形成ということにも関係してくると思うのですが、従来であれば、この研究というのはややもすれば古墳時代の側から遡って物事を考える、あるいは、中核的な地域、例えば九州、畿内、山陽、吉備、出雲ですね、中核となる地域に焦点を当てた研究というものがどうしてもそういう傾向があったと思うのですが、こうした目を持つことによって、そうではなく、それぞれの地域でどのようなネットワークが作り上げられ、それが次第に改変されているのか、そういうことを読み解く、そんなことができるのではないか。地域を等しく価値づける、歴史的価値を認めて横断的に、重層的に見てみようじゃないか、それはアジアについても同様です。それから左下に、アジアに三つの丸を付けましたけれども、どうしても議論がこれまではアジアレベルになると鏡の研究が主になったと思いますので、そうすると日本列島の丸、それから中国の黄河中流域の洛陽を核とする丸、そしてその間に建つ楽浪郡あるいは帯方郡といった中間地帯の核となる地域、この三つの地域に焦点を当ててつながりを考えてきた。そうではなくて、その中間地帯、特に日本列島と楽浪郡帯方郡との間の地域、朝鮮半島の地域も横断的に見るようになってくるだろう。アジア・日本列島を重層的に、どこかの地域だけに焦点を当ててということではなくて、彩り豊かに描き出そうという、こういう構想であります。ただ、これは今年始まったばかりでありますので、この後の話も何か結論めいたことをお話するというのではなくて、こんな風にこれから、議論研究を進めていきたいということで内容をご紹介します。

この古代歴史文化協議会は14県が共同でテーマを設けて、共同研究し、その成果をこうした場で社会発信するという、こういう取組でありますけれども、私もそこに少し成果を出し、私の研究の中に頂戴して、14県の皆さんの研究の成果発表とを受け継いでこれからの研究に生かしたい、そういうわけであります。

今日の話の内容を四項目用意いたしました。最初に江戸時代に志賀島で発見された金印の話を行います。偽物説があるのですが、そうではない。これに関しては実物であるという、真印であるということを通して、中国正史の信頼性というものが高まると判断しています。2として、それを通して、魏志倭人伝の中に見えるアジアの地域間関係あるいは外交交渉を見よう。歴史記録の確かさということをもう少し信頼性をもって受け止めて、考古学的な議論の中に組み込もうという意図であります。3つ目として、実際に広域交流の重層性は、どんなものから、どんな風に見えるのか、方向づけ、糸口をご紹介します。それから4、広域連携の道筋、これは古墳時代社会形成に向けた動きを最後に取り上げて、そして話を閉じるということにしたいと思います。

「漢委奴國王」金印

最初は金印であります。最近では自分の名刺にこの金印の、福岡市博物館で1000円でゴム印を売っていますので、それを名刺に押しまして、まあ十年くらい金印と格闘すれば、お叱りは受けることはなかろうと思ひまして押ししているのですが、それくらいこの金印に集中しています。ですから最近では「わが金印」と不遜な物言いをしています。それはさておき、この金印はご存じのように江戸時代に博多湾の沖合に浮かぶ志賀島で発見されました。印面には漢字五文字、三行、漢委奴國王（かん・い・ど・こく・おう）、様々な読み方がありますので、私は一文字ずつ音読みします。

「漢」はもちろんのこと漢王朝であります。それから「委」は、戦後の中国の簡体字もそうですが、同じ音の文字を簡略な文字に置き換える。こういう仮借（かしや）という措置で人偏のついた「倭」を人偏を抜いて「委」で表現した。そして「奴」これは奴国、博多界隈＝福岡平野の「王」であり、漢王朝が倭人の中の奴国の王として皇帝が認めるというこういう文字が記されているわけであります。あえて読むとすれば、「かんのわのなこくのおう」と読みます。異論がありますので、音で読みます。これは朱肉で押しますと文字が白くなります。白文の印ということになります。これは封泥用の印、これは後で言います。それから印の文字が記された部分を印台といいますが、その上にひもを通してぶら下げるための仕掛け＝鈕がついています。この鈕は蛇の形をしているので、蛇鈕（じゃちゅう）です。音読みでは「だちゅう」ですが、駱駝の鈕もあり、それも「だちゅう」、識別するために「じゃちゅう」や「へびちゅう」、駱駝のものは「らくだちゅう」というようにしております。さて、封

泥用の印だといいましたが、これは何かといいますと中国古代に物品を封じる際、場合によると木や竹に書いた文字をふさいだり、物も結わえたりする。こういう物品や竹の文書をくくった際に、それを第三者が開けてしまわないように泥で封印をするんですね。ひもで結んだ上に封印をするわけです。紐の下から検という板をあてがって、ひもを上につけて、泥をのつけてそこにハンコを押す。そうすると泥の上に文字が浮き彫りになるという仕組みであります。封泥、封じるための印ということです。紙に印を押すようになるのは、ずっと後世、おそらく私の判断では南北朝時代に急速に普及すると思います。これは話すときと長くなるので省略します。



左上にサイズが書いてありますがけれども、印面の一辺が平均2.347 cm、まあ2.35 cmあります。後漢代の一寸です。一寸四方の小物でこれは官僚が持つもので、官印といいます。しかし、これは紐を通して身につけるもので、一寸四方しかない。こんなに小さいわけです。彼らは懐に入れて持ち歩いているようです。

これは、現在の平壤付近にあった楽浪郡のお墓に描かれていた絵画を林巳奈夫先生が模写してわかりやすくされた図ですが、この前のほうに帯のようなものをたらしめています。これが印に通す紐なんですね。わざわざこんな大きいのではないかと思います。彼らにとってとても大事。実は印というのは、官位、爵位に応じて印の材質、綬の色が区別されておりまして、この人物は左側に黄色の綬、右側に青の綬を持っている人がいます。ハンコは懐にあるわけですが、綬を垂らしていることによって遠くから見てもどっちの人がランク上なのが一発で分かる。彼らにとっては社会的官位を示す重要なもの、言い過ぎかもしれないがハンコより大事かもしれない。印綬はこういうもの



さてこの印は江戸時代に発見されたその年に、福岡藩の儒学者である亀井南冥がこれは『後漢書』に見える記事と一致すると判断をしました。建武中元二年（西暦57年）です。「倭の奴国、奉貢朝賀す。」つまり貢物をもって皇帝に会いに来たと。使人=使いのものは自ら大夫と称した。倭国の極南界=一番南である。「光武賜うに印綬をもつてす。」この印がこれだという判断を南冥がします。

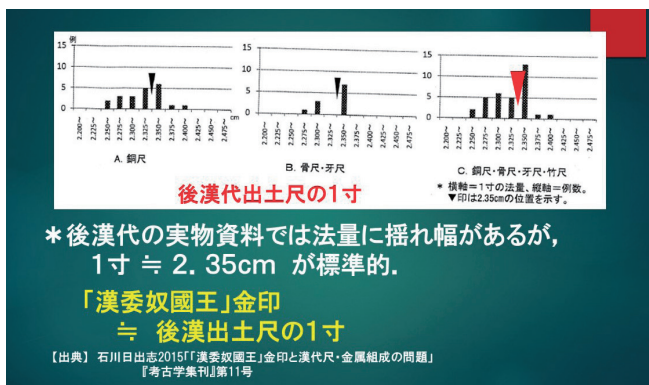
これは、現在国宝になっています。日本列島の有力者が中国の政権、王権に、その中枢の皇帝と外交交渉した最初の記事になりますので、それを示す物証だということで、国宝に指定されているわけです。しかし、江戸時代以来繰り返し偽物説が出てきており、最近でも二人の方、鈴木勉先生と三浦佑之先生が、ここ20年ばかり、これは江戸時代に作られた偽物であると強く主張されております。これは、困ったと思ひまして、考古学界では誰もこれを江戸時代のものだなんて思っていないですね。なぜかといえば、1968年に岡崎敬先生、東洋考古学・アジア考古学の大先生、私の尊敬する先生ですが、この印の詳細な計測をして、その1辺が後漢代のお墓から出てきた物差しの一寸と一致するというので、これは江戸時代に作られたものではない、だから本物だという論文を書かれています。これ以来考古学界では偽物だと誰も言いません。いったとしても聞いてもらえない。ところがこの二人は偽物だと。なぜかといえば、これは三浦先生が言っていますが、江戸時代にすでに漢代の一寸というのが2.3 cm、一尺23.5 cmということがわかっているということで主張されている。確かに調べるとどうもそう。この金印が発見されるよりも100年前に中村惕齋（てきさい）という人物がすでにそれを解き明かして記録に残している。これを基にして、漢代の物差しが復元されて、あるいは代々伝わってきた伝世の物差しとこの記事が一致するというので、この物差しが作成されて江戸時代の文人の間に流通していた。ですから後漢代の一寸の印なんて江戸時代に簡単に作れる。こういうわけです。

これはびっくりしまして、そうはいいまして岡崎先生は後漢代の墓から出た物差しと照らし合わせて一寸だという風に主張されたわけです。これをもう一度調べてみようということで集計してみました。三つもグラフがありますが、右端ですね。数字が細かいですが、後漢代の墓から見つかった物差しの一寸がどれだけの長さということを集計してみたんですね。0.025 cm、1ミリの4分の1刻みで集計してみたものです。多少ブレがありますが、赤い三角のところは2.35 cm。ここを中心として前後にふれるということになりますので、確かに岡崎先生が調べたとき以後のデータを見ても確かにこれは後漢の一寸に合致するということが言えます。ただし、岡崎先生はだから

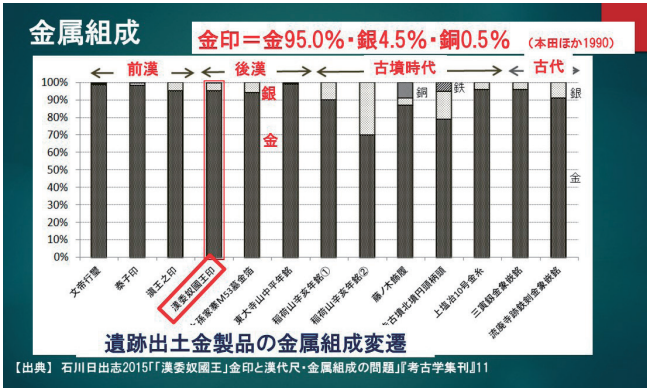
これが本物だという主張をされたわけですが、江戸時代にそれがわかっていたので、一寸が何センチかということではこの印が本物が江戸時代に作られたものかという判断はできない。ただし、後漢の時代のものとの矛盾はしないということになります。

岡崎先生と同じ方法で、この真贋を判定するのは難しいため、いろんな角度からやってみようということで、つまみの蛇の鈕の形が時代によって前漢時代から後漢、魏、晋の時代までずっとあるんですね。集めてみましたら確実なもので四十数例、不確実なものを入れると六十例ほど集めることができました。見てみますと時代変遷がある。今日は詳しくは申し上げませんが、この印は後漢初期、57年、前漢時代の特徴を一部受け継ぎながら後漢以後の特徴も現れたというよりも、この印のデザインが基になってこの後のへびちゅうの印の形が型式変遷していくということがわかりましたので、全く矛盾がないということがわかりました。江戸時代にも蛇の鈕の印があるということは知られていたのですが、どんな形かということは誰も知ることができませんでした。実は、この印はへびちゅうだといいましたが、真ん中にありますけども、鈕の下半分は四つ足の動物、実は駱駝なんですね。上半分だけが蛇です。これは、よく見ると、福岡市博物館でものごく大きな鮮明な画像で提示されていますのでご覧ください。ちゃんと前後左右四つ足がきれいに見えます。最初駱駝の鈕として作られて、それが上半分に蛇の形が作られた。これはどういうことかといいますと、倭の奴国の使いが来た時に東夷、高句麗だとか、漢から東・東北のほうにいる諸民族を東夷といいますと、東夷の人たちにあげる印は駱駝の鈕なんですね。これは匈奴とか北方あるいは西方の諸民族と同じものを与えています。これは実例から確認することができます。ですから、倭も東夷の一員ですので、当然駱駝の印、で作ったのですが、使いのものは倭国の極南、一番南だということで、それは南だったら蛇だと、南方の蛮夷の世界には蛇の鈕でつくりかえたということだろうと解釈します。それは置いておいて、重要なのはこの蛇の形が、首が後ろを向くことです。不思議な形でしょ。ところがこれは左端に示しましたが、江戸時代の、あるいは私たちにとって蛇が首を後ろに向ける、動物が首を後ろに向けるのは異様に見えますが、漢代であれば、当たり前なんです。前向いたものもありますが、後ろ向くのはかなりの例があります。少しかじればすぐわかります。しかし、江戸時代にはこんなことわかるわけありません。左の図上には虎が後ろを向いています。下は竜が後ろを振り返っています。これは普通の図像です。これが漢代、後漢の時代ですので自然に首を後ろに向けている。何の不思議もないわけです。こんなことがわかったのは20世紀になってであります。

それから金属組成が測定されています。表面の金属組成ですが、金の純度95%、銀・銅との合金であります。江戸時代に偽物作るとしたら、どれくらいの金の比にすればいいかわからないはずなんです。じゃあこの金95%というのは遺跡から発見される金製品、印だけでなく金製品を戦国時代からずっと集めて、金の純度の変遷を調べて、その中に金印の金95%を置いてみたら、矛盾するかしらないかと調べてみたのがこの図です。何ら問題ない。漢代の金製品は金の純度95~99.9%でありますので、全く問題ない。江戸時代にこれを知る



これは実例から確認することができます。ですから、倭も東夷の一員ですので、当然駱駝の印、で作ったのですが、使いのものは倭国の極南、一番南だということで、それは南だったら蛇だと、南方の蛮夷の世界には蛇の鈕でつくりかえたということだろうと解釈します。それは置いておいて、重要なのはこの蛇の形が、首が後ろを向くことです。不思議な形でしょ。ところがこれは左端に示しましたが、江戸時代の、あるいは私たちにとって蛇が首を後ろに向ける、動物が首を後ろに向けるのは異様に見えますが、漢代であれば、当たり前なんです。前向いたものもありますが、後ろ向くのはかなりの例があります。少しかじればすぐわかります。しかし、江戸時代にはこんなことわかるわけありません。左の図上には虎が後ろを向いています。下は竜が後ろを振り返っています。これは普通の図像です。これが漢代、後漢の時代ですので自然に首を後ろに向けている。何の不思議もないわけです。こんなことがわかったのは20世紀になってであります。



縦線3条の上部が
緩く弧を描く

逆し字形

「漢委奴國王」金印
の「王」の特徴

「漢委奴國王」
金印

(年代観は、基本的に、孫慰祖
1993『兩漢官印匯考』に準拠)

【出典】孫慰祖1993『兩漢官印匯考』

前漢代の特徴がわずかに残存

前漢後期～王莽代～後漢前期の特徴がある

直前の王莽代(AD8~23年)の封泥は
「漢委奴國王」金印(AD58年)より古い特徴がある！

「女」

「王」

2009年西安北郊廬家口村発見封泥
(封泥拓本：馬嶺2016『新出新莽封泥遺』)

ことはできないということでもあります。

さらに、考古学者はねちっこい、しつこい。一番重要なのは文字です。詳細にお話ししますと2時間くらいかかりますので5分以内にしましょう。例えば、文字は時代によってかなり変わります。特に前漢から後漢の移り変わりは、文字の変遷がものすごい。逆に言いますと文字で時期がかなり絞りができます。「漢」という字はサンズイの部分に際立った特徴があります。右端の図で、一見するとまっすぐのように見えますが、まっすぐの5本線のようなのですが、よく見ると左上が逆エル字形です。上半分はちょっとまがっている。二つの特徴があります。一見するとき綺麗な縦線五本ですが違うんですね。この癖がどういう時代性を持っているのか。

これは中国で印の時代変遷がかなり詳細に研究されていますので、私の印研究の師匠である、上海博物館の孫先生の成果をお借りしまして、サンズイだけ抜き出してみました。前漢、王莽の時代、後漢の時代。前漢時代は上半分が曲がっている。水の流れを表現しています。それが後漢代になるとまっすぐになる。金印はちょうどその中間的な王莽の時代よりもちょっと後漢の特徴を持っています。そしていろいろ五文字全部調べますと、これが全部、マークしたところが前漢の時代の特徴をわずかに持っている。この部分は王莽時代の特徴。そして、この三か所は後漢の時代の特徴が表れ始めている。ということはこの三つの特徴を兼ね備えているということは後漢前期といえます。

さらに、王莽の時代、金印の一世代ほど前の封泥がたくさん発見されていますので、それと文字の照合をすると、王莽の時代の封泥の文字とわが金印を比較しますと、古い時代、前漢時代の特徴をより強く残している。これで決まりだろうと思うわけです。私は真贋論争は終結したと思っています。お二人とは平行線がありますが、もうそんな真贋論争なんて終わりにして、次に進みましょう。私はもし金印研究して、これは危ないとなったら最後居直ろうと思います。この金印がだめでも『後漢書』があるさ。それで議論進められると思ったのですが、これは間違いなく実物だということがわかると、欲が出てきますね。これによって『後漢書』の記事の信頼性が高まったんだという、こういう風に考えたわけです。

建武中元二年に、倭の奴国が奉貢朝賀する。それに対して、光武帝が印綬を、金印をあげた。その50年後に倭国王帥升が生口、奴隷と解釈するのが定説ですが、これはちょっと誤解を招く気がしますが、それはさておき、請見を願ってきた。倭国王という記事があります。『後漢書』の倭人に関する記事は、『魏志倭人伝』の記事と非常によく似ているのですが、この二つの記事は『魏志倭人伝』にないものです。これ

は『後漢書』だから中国側で勝手に作った可能性がないとは言えない。ただこの金印が確かだということになりますと、この記事は確かだと、こういうことがあったのだと。なぜ正確に50年の差なのか、それはわかりませんが。といいますのも、この『後漢書』に関しては、長らく疑念が持たれています。戦後、邪馬台国論争が活発化するきっかけになったと思いますけれども、1951年に岩波文庫から『魏志倭人伝』がでました。そのなかで、石原（道博）先生は主としてこの記事は魏志倭人伝によったことは明らかで、その刪潤の方法、引用した方法は極めて巧妙という、妙な言い方をしている。そのためにこの二つの独自の記事を認めつつ、『後漢書』の倭人の記事への信頼性といいますか、少し疑わしい『魏志倭人伝』から持ってきたんだという扱いが主となった。『後漢書』の信頼性はもう一つの部分があった。ところが、10数年前に、早稲田大学を退職された福井重雅先生が、これは5世紀に范曄という人物が南朝、宋の時代に書かれたものなのですが、違うというわけですね。後漢書というのはそもそも10いくつあってその中の范曄のものは10番目くらいなので、後のほうのものなのでその前に10いくつある。それらはほとんど散逸してないのだけれども、例えば、華嶠という人物が3世紀後半、西晋代に書いた『後漢書』の一部がほかに引用されて見えるわけですね。それと非常によく似ていることから、『魏志倭人伝』を持ってきたのではなくて、華嶠、すなわち『魏志倭人伝』が編まれたのと同じ時期の別の『後漢書』から持ってきたものだと、踏襲したものとみるべきという、そういう主張をされています。これがどの程度、アジア中国史の世界で承認されているのかわかりませんが、非常に重要な指摘だと思います。

「魏志倭人伝」にみる〈倭一魏〉間外交

そういう目で『魏志倭人伝』の信頼性あるものとして、歴史史料を見よう。それを考古学の資料解釈の際に参照してはどうかということです。ただ、ちょうどこの、今日話題にしているこの時代は『魏志倭人伝』というのが非常に興味深い内容を備えています、使うに当たっては、かなり留意が必要です。いくつもの留意が必要なのですが、あえて言えば、この情報源は最低でも三つある。①帯方郡、魏の東方進出の拠点である帯方郡の使者がやってきて、直接見聞した記事。②帯方郡の使者が得た主に伝聞記事。やってきているような情報収集したにしろ、そういう自ら見ていないけれども伝聞情報としての記事。③魏王朝の中核の外交交渉の記事がある。①と③は信頼性が高いと私は思います。そういう目でこの記事を読むということです。桓霊の間、桓帝と霊帝の時代が終わった2世紀の終わりに卑弥呼が擁立されたということの記事の後、しばらくしてから239年以後、数年おきに倭王卑弥呼は魏に使いを出しているわけでありまして。そして、247年の後、死すという記事が出てきます。この記事の内容をもう少し見てみようと思います。これがとても重要だと思います。景初三年（239）の交渉内容。倭国から魏の皇帝に何をもっていったかということ、生口男4人、女6人、計10人。班布=まだらの布2匹2丈。これは皆さん説明すると長くなりますので、ご自分で調べてください。これに

対して、魏の皇帝から、倭国に与えられたものは何かというと、卑弥呼には「親魏倭王」という称号と金印紫綬。二人の使者にも称号、「率善中郎将」「率善校尉」という称号の銀印の青の綬。それプラス4種類の織物、絹織物と毛織物等4種類。数は桁違いであります。これが正式な「貢直に答う」、倭国からの貢に対する答礼であるということですが、そのあとに特に汝に好物を賜うということでおまけをつけてるんですね。好物は別に好きなものということではなくて優れたもの

ということですが、織物が3種類ですね。絹と毛織物が3種類。それから金、五尺刀2口、これが今日のミソです。そして銅鏡100枚、従来散々考古学者が議論してきた。そして真珠・鉛丹。これが、翌年に使いが帰ってくるんですが、そのあとの記事に出てきて、これもなかなか面白いんです。240年に帯方太守弓遵が、帯方郡の長官が建中校尉の職にある梯儁（ていしゅん）という人物たちを随行させて、倭国に行って倭王に会った。その書く順番。まず詔書、印綬、その次に金帛、錦罽（きんけい）、それから刀、鏡、采物。金、織物系が最初にあつて、刀があつて、鏡があつて、采物がある、この順番。これは左側の239年の記事の順番をきれいに踏襲している。つまりこの順番というのはあげる側、魏の側が倭王に物品を与えるときのランク付けとみてよいのだという風に考えます。私が重要視するのは、この中で今日の場合、本当は織物が最初ですが、考古資料としてはなかなか見つからない。その次に鉄刀、その次に鏡。これまでは鏡の研究がすごいですが、これはそれなりの成果ですけれども、大刀も非常に重要。あげる側はランクが上なんじゃないんですかということです。

景初三年(AD239)の交渉内容	要約と記載順に注目!
<ul style="list-style-type: none"> 【倭国⇒魏皇帝】 ・男生口4人・女生口6人 ・班布2匹2丈 【魏皇帝⇒倭国】 ・卑弥呼=「親魏倭王」制詔・金印紫綬 ・使者2名も「率善中郎将」「率善校尉」 ・銀印青綬 ・絳地交龍錦5匹・絳地縹罽10張・ ・縹絳50匹・紺青50匹 *以上が「貢直に答う」+ 特に汝に好物を賜う ・紺地句文錦3匹・細班華罽5張・白絹50匹・金8兩・五尺刀2口・銅鏡100枚 ・真珠・鉛丹各50斤 	<ul style="list-style-type: none"> ■正始元年(240) 「太守弓遵、建中校尉梯儁等を遣わし、詔書・印綬を奉じて、倭国に詣り、倭王に拝仮し、ならびに詔を齎し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。倭王、使に依って上表し、詔恩を答謝す。」

広域交流の重層性

広域交流の重層性のことですが、右側に日本列島内の地域間首長間の物品のやり取り、それに伴う交流を列挙しました。左側は外交、大陸側とのもので、筆頭に外交、これは『魏志倭人伝』などに記されたレベルの話であります。ランク①～④の順であります。それだけではなくて、外交交渉ではなくて、経済活動としての交易、あるいは交換というものもあるでしょう。鏡、青銅の地金、ガラスなどは多くは交易。鏡などは両方にまたがると思いますけども、鏡は交易のほうが面数としては多いはずであります。さらに(3)として中国、魏・後漢ではなくて、朝鮮半島から倭へというものもあります。これもいくつかのランクがあります。こういうものを少なくともあげる側、出す側はランク付けがある。特に外交ではある。そこを少し、目配りしながら考古資料を読まなくちゃいけない

じゃないでかと思うわけです。今回の議論の研究の中では五尺刀というのは非常に注目されている点でしょう。どういうものかという、なかなかないのですが、我々は五尺という一尺が30.3cmという頭がありますが、これは後世のもので、当時は実際に魏の墓で発見された物差しがありまして、23.8cm前後＝24cm内外ということになります。五尺刀というのは大体120cmということになります。150cmではないです。150cmなんてものはこの時代ないのではないかと。ところが、この魏の時代の五尺刀とすると実はある。その前に中国側で五尺刀を探しますがなかなかないですね。やっと昨日探し当てました。湖北省の北端、魏の領域の中に115.5cmというものがありました。素環頭の大刀です。鉄のものでありますので、形がよくわからないというのは、同じ墓から出てきた青銅製の緩い内反りの素環頭を入れてあります。形はこれで分かるということになります。

3. 広域交流の重層性

対外	列島内
(1) 外交：後漢・魏から倭国へ ①. 称号と印綬 ③. 鉄刀 ②. 織物類 ④. 銅鏡 (2) 交易：中国から倭国へ ①. 銅鏡 ②. 青銅器地金 ③. ガラス：中樞からではない (3) 交易：韓から倭へ ⇄ 倭から韓へ ①. 鉄器・鉄地金 ②. 青銅器ほか	(1) 首長間交渉 ①. 大陸文物交換 ②. 儀礼・儀器交換 (2) 地域間交易・交換 ①. 儀器・生活財交換 ②. 情報・デザインの共有・交換

桑浪郡・帯方郡

■ ②. 鉄刀：「五尺刀」とは・・・

115.5cm
87.6cm(青銅)

【出典】1: 襄陽市博物館2016 『三国遺跡』科学出版社

・魏代の一尺＝23.8cm ←出土尺3例
*五尺＝119cm 三国～晋8例＝24.2～24.5cm

【出典】丘光明 2012 『中国古代計量史』

福岡県
上町向原遺跡
全長 約119cm

【出典】糸島市教委 2017 『新訂版 国史跡曾根遺跡群 平原遺跡』

鉄刀の扱われ方

福岡県
平原遺跡

【出典】糸島市教委 2017 『新訂版 国史跡曾根遺跡群 平原遺跡』

全長 80.6cm

そういうものが日本列島であるんですね。これは福岡県の糸島市に上町向原遺跡、119cm。もう、ドンピシャ五尺刀になります。これがどういう扱いを受けているのだろうかということが問題になります。例えば、同じ糸島市内の平原遺跡。弥生時代後期後半の最有力者＝伊都国の墓が発掘され、そして大量の大型の鏡と共に、長さ80cmの素環頭の大刀が見つかっています。これは埋葬施設と重なるように出てきている。そのような扱いをしているのか。先ほどの外交交渉あるいは、経済活動としてのどのランクにあたるものなのか、そしてそれを九州側が、伊都国側がどう受け止めて、どう扱ったのか、そこを読まないといけない。なかなか大変ですね。それから気になるのが、奈良県天理市の東大寺山古墳。奈良盆地を一望することができるすごくいい立地のところに、4世紀後半、前期後半の前方後円墳がありますが、そこに一本の後漢代の内反りの鉄刀、長いものが混じっていました。峰の部分に鑿で文字が彫られそこに金が埋め込まれています。金錯銘鉄刀ですが、冒頭が中平□年、中平というのは霊帝の末年であります、180年代であります。これは環頭の部分が断ち切られていますので、それが残っていれば五尺にかなり近づくということになります。

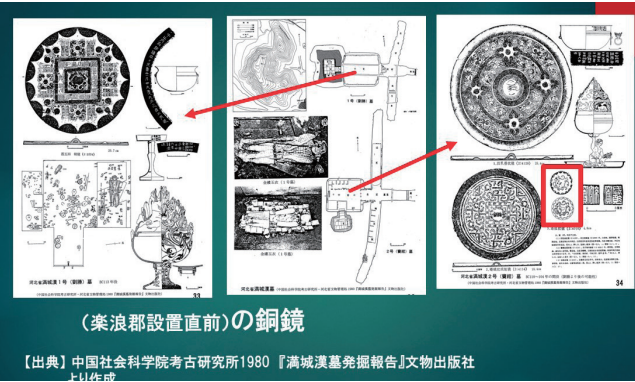
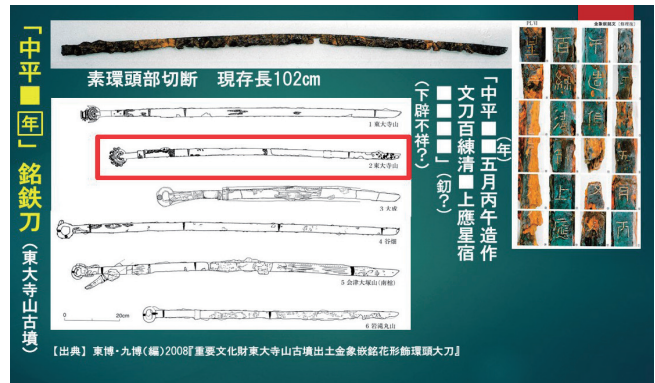
それから、あげる側の、『魏志倭人伝』でいうところのNo.2のランクである鏡、これもなかなか面白い。

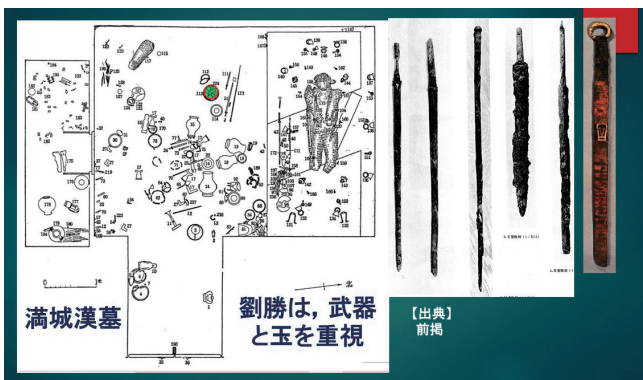
鏡といっても、すべて外交交渉で入手したわけではない。あるものは大型のものは外交交渉としてですが小物はそうではない。しかも、サイズの使い分けが中国でもそして、九州でもちゃんと行われている。これは刀があげる側と受ける側がどういう認識差なのかという非常に難しい問題があるのですが、この鏡を見るとかなり中国側の認識を理解していた節がある。これは岡村秀典さんも『三角縁神獣鏡の時代』の中で触れられておりますけれども、大中小、これは前漢代、中期後半から末であります。須玖岡本遺跡D地点で大中小3ランクあって、これは20cm大の鏡が3面入っています。中くらいの鏡が多数。小さいのも多数、こういう構成です。これはどういうことかという、画面が小さいのですが、中国でもちゃんとランクに応じて鏡を墓の中に使い分けしている。

これは香港のすぐ北側の広州市市街地にある前漢の南越王墓であります。王がいるところは、鏡は入りません、玉璧しか入りません。青銅の鏡なんかは入りません。別室に王のための副葬品があってそこに殉葬された人物と一緒に大型の鏡が入ってきます。その東隣には4人の夫人が埋葬されています。殉葬とされていますが、そこには中クラスが圧倒的多数。そして、小さいのが少し。4人の夫人の中でもちゃんとランク付けがあります。それに応じて鏡を使い分けしているんですね。

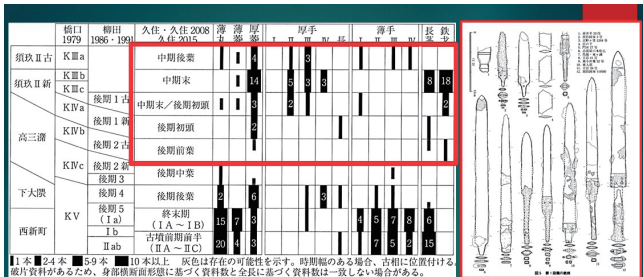
そういう鏡の使い分けが日本列島で須玖岡本遺跡、三雲南小路遺跡もそうです。かなり受け止められているという風に見える。それはその同じような現象はこの後の弥生時代後期後半の平原遺跡でも同様で、大中小とありますが、それにプラスして45cmというものすごく大きな、私が見た中では、中国でも前漢代は40cmクラスがありますが、それに匹敵する、べらぼうに大きいものがあります。この後どういう扱いを受けているのか、中国側の認識をある程度受け止めたものがその後どうなるのかということに興味があると思うんです。

黒塚古墳から多数の三角縁神獣鏡と1面の画紋帯神獣鏡が見つかりましたが、真ん中で遺骸に伴うのは一番小さい、しかし一番古い画紋帯神獣鏡で、周りには大きな20cmあまりの三角縁神獣鏡がある。ただ、中国でもいろいろなものがある。例えば、河北省の満城漢墓という墓であります。左側が王の劉勝（りゅうしょう）で、右側に出しているものが夫人の竇綰（とうわん）という人物のお墓なんですけどもやっぱり、地方の王ですが、ちゃんと20cmを超える鏡を持っている。ところが夫人のほうは1面だけ小さな鏡。金縷玉衣（きんるぎょくい）というものすごいものに包まれて埋葬されているんですけども、左手の中に直径5cmくらいの小さな鏡があります。やはり小さな鏡を特別扱いされているというものもあるので、そういうものが



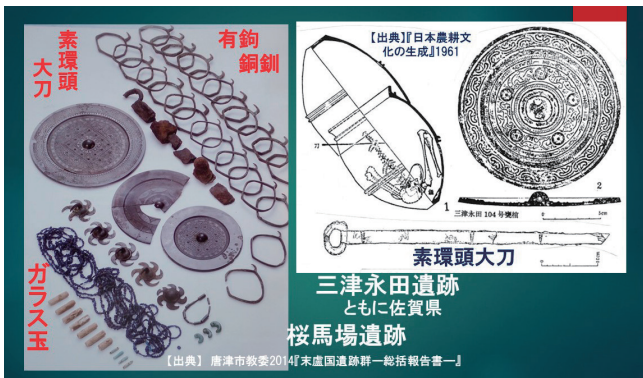


残っているのかなど。お墓の中で鏡がどう扱われるかというのを考古学ですから注目しないといけない。この満城漢墓で重要なのはむしろ鏡よりも武器扱いですね。満城漢墓、王のほうの劉勝の墓ですが、劉勝に副葬された地区には鏡は入りません。鏡はこの（緑部分）漆奩（しつれん）という漆塗りの箱の中に化粧道具セットとして入っています。劉勝と一緒に入るのは玉（ぎょく）の類と鉄の武器、長物の武器、環頭の大刀や長剣が入ってくる。武器が非常に重要な扱いを受けている。時代は古いですが、ここでもあげる側としては武器のほうが上だということがこれを見るとわかるわけですね。



それがこういう武器を重視するという風習が日本列島にこの後入ってくるわけであります。北部九州ですと弥生時代中期後半から鉄の素環頭や鉄の剣などが普及し始め、その中には素環頭は漢様式の武器でありますし、剣の中でも長いものについては、中国系のもののがかなり入っているわけであります。中国系の武器を入手し、そしてそれがお墓に入ってくるというわけであります。例えばこれは福岡県飯塚市の立岩遺跡、中期後半でありますが、鏡と一緒に鉄製の武器が入り始める、さらにほかの墓でも鉄製の武器、剣、矛などが入ってきます。この中でもかなり肉厚でありますので、中国系の鉄製の武器がかなり入っているはずであります。この辺の詳細は省略いたします。ただし、中期後半段階、紀元前1世紀段階では、武器副葬が点々とみられますが、まだ決して多いというわけではなさそう。私の情報収集が少ないかもしれませんが、後期になると九州北部、福岡界限ではかなり明瞭に認めることができます。左は佐賀県唐津市の桜馬場遺跡、残念ながらもたずたになっ

J.Ryanによる北部九州における鉄剣の変遷
【出典】ライオン・ジョセフ 2021『弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討』『考古学研究』269



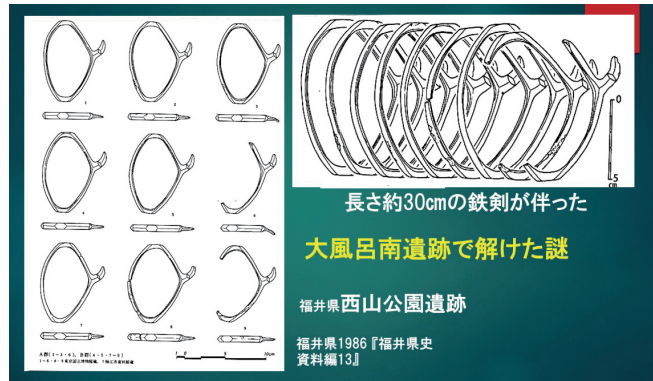
ながらずたずたになっていますけれども、かなりの長さの素環頭の大刀が入っています。それから、吉野ヶ里遺跡のすぐ近くの三津永田遺跡にも素環頭の大刀がちゃんと入っています。それから、この二つの遺跡、桜馬場も三津永田も弥生時代後期といっても、一段階下る、初頭とは言い難いのですが、もう一つ、物はないのですが、注目していいなと思っているのは井原鍮溝遺跡。江戸時代に鏡数面見つかったところの記録の中に、「鎧の板のごときもの、また刀剣の類あり」という、これが鏡と一緒に出てきたという記事があります。鎧なんてこの時期ありませんので、これは「朽損ねてその形全からず」。鎧じゃないんですね、大刀、刀剣の類が傷んで、そしてバラバラになって、これを記録に残した青柳種信が、鎧のごときものという判断をしたのだろう。ですから、ここではかなり鉄製の刀剣が入っている。後期の早い段階から鉄の刀剣が入っているという風に見てよいのではないかと思います。後期になると、鉄製武器の副葬の一般化と同時にガラス製品の普及もかなり明瞭に読み取ることができます。中



期段階とは桁が違う。一つの墓から数千個出てくるといふ事例が確認されます。そして九州に根付いた鉄製武器の流通そしてそれをお墓に副葬するという流儀は特に日本海ルートで山陰にそして北陸へと普及いたします。

左側は京都の天橋立を見下ろす大風呂南墳墓群の例です。頭の部分に銅釧が13個ずらずらと並んでいます。福井県西山公園遺跡でも木を植えるときに銅釧が9個見つかったという例があるのですが、長さ30cmの鉄剣が出てきたという記録がありますので、大風呂南遺跡が出た時点で、これは西山公園遺跡もこんな感じなんだと。桜馬場のように、九州の武器や装身具を副葬する流儀が北陸まで普及している。こういう鉄製武器の副葬あるいは装身具、これはガラスも入ってくるかもしれない、その副葬はずっとさらに東に、長野県まで確認することができます。長野県の根塚遺跡では、三本の鉄剣が出てきて、そのうち一番長い74cmの長剣の柄のところに渦巻飾りが三つついて、これは韓国、朝鮮半島島南部の釜山・金海周辺、あの一帯で流行ったデザインであります。ただし握りの部分が剣の身の部分と軸を違えていますので、それは東日本のデザイン。要するにこれは、おそらくこういう剣を作ってくださいというミニチュアの模型を作って、それが朝鮮半島まで行って、それに製品が返ってくると、ものすごい遠距離の物流、発注・供給という事態が起きているという非常に面白い事例であります。ガラス玉も180個出ています。

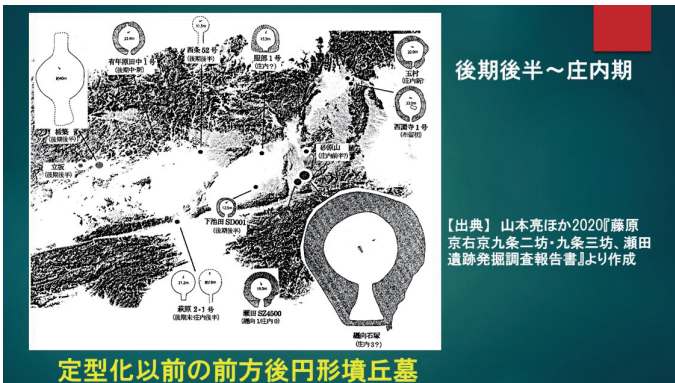
さらに、北方、東北地方、北海道にまで鉄製品、鉄製武器などは広がっています。このように日本海側を中心としてですね、大陸に由来するものがかなり広く日本列島内に流通している。こういう日本海側を中心とする相互交流の蓄積があるということでもあります。それが弥生時代後期。そのあと古墳時代社会ができあがるのですが、考古学的に古墳時代社会の象徴とみられてきた定型的前方後円墳、これが、古墳時代社会がどう出来上がったということを知るために、古墳時代のシンボリックな定型的前方後円墳がどうやって出来上がったのかということを検討がずっと続けられてきましたが、畿内で定型的前方後円墳ができ上がったとしても、そのベースとなるのは、西日本各地、吉備あるいは出雲、場合によっては丹後、銅鏡の多数副葬というのは九州、他地域のいくつもの地域の墓に伴う流儀が一体となって、それぞれの地域の最有力者が埋葬される墓という仕組みができ上がる。



広域連携の道筋

そういう地域間連携がどんな風にでき上がったのかという議論ですね、それと接続を図るとどうなるかということですが、首長間の広域連携が認められる最も象徴的なイベントは、吉備と出雲との首長間のやり取りであろうと思います。そこで、出雲の西谷3号墓ですと、そこに吉備の特殊器台壺だけではなくて丹後、北陸方面の土器も入っていますので、こうした首長の葬送の場面





定型化以前の前方後円形墳丘墓

にこれらの地域が立ち会っている。当然各地の有力者が関わっているということでもあります。ただですね、こうやってみていきますと吉備を含む日本海側が広域連携の仕組みを作ってきたように見えますが、はたしてそこまで考えてよいのだろうか。私も思うのですが、今日もそういう話が主になるとは思いますけど、別の角度でもいつも見ておかなくちやならない。

たとえば、前方後円墳出現といったときにその前段階に前方後円形の墓がどこに作られているかというと、吉備に始まって東部瀬戸内から、弥生後期後半から庄内期までずっと普及してその周辺地域にはないわけです。これは何か。それからその前段階、弥生後期の畿内5様式の後半のある段階に銅鐸がなくなるとは思いますけど、この銅鐸、滋賀県辺りで集中的につくられているんじゃないかという意見もありますけれども、この地金は洛陽、後漢の都周辺からきてははずです。どうやって流通したのか。瀬戸内ルートですか、それとも鉄器と同様に日本海ルートで？だから滋賀県に製作拠点が移ったということが考えられるのかどうか。こんな鉄器の流通を考える場合には銅鐸の原料がどう動いたのかということにも目配りが欲しいという風に思います。日本海側で顕著な鉄器流通、普及というものが非常によくみえるのですが、一方では、もう一つ同時期に進んでいる、青銅の地金の流通はどうか、それを併せ考える必要があると思うわけです。結論のない内容ですけども、これからこんな目で研究してみようと思っていることですので、皆さんいろんなことをお教えいただければありがたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



パネルディスカッション

石川 日出志 (明治大学文学部教授)
君嶋 俊行 (公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室室長)
林 大智 (公益財団法人石川県埋蔵文化財センター主幹)
城門 義廣 (福岡県教育庁文化財保護課技術主査)
石田 爲成 (岡山県古代吉備文化財センター主幹)
三原 翔吾 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター主査)

【司会：宮地】 それではパネルディスカッションに入ります。パネルディスカッションは「刀剣が語る古墳時代の幕開け」と題しまして、石川先生のほか各地域の代表5名を加えて行ってまいります。それではここからの進行は鳥取県の君嶋さんをお願いしたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

刀剣のはじまりと広がり (弥生時代における鉄製武器の導入と展開)

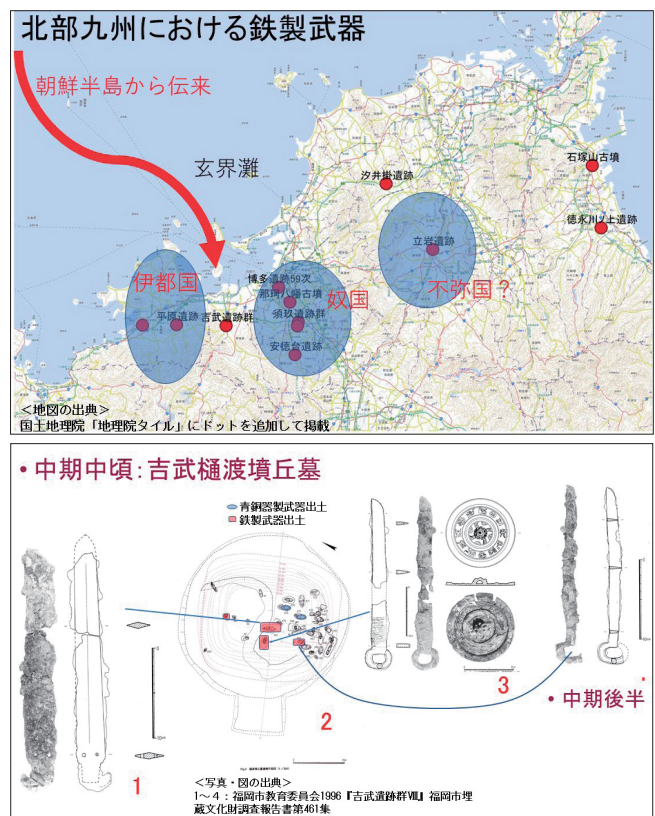
【君嶋】 このたびコーディネーターの大役を仰せつかりました鳥取県の君嶋です。どうぞよろしく願いいたします。それではディスカッションを始めていきたいと思っております。石川先生、パネリストの皆さんよろしく願いいたします。

今日の講演会は「刀剣が語る古墳時代の幕開け」がテーマでございますので、このディスカッションでは「刀剣の研究からは、何をもって古墳時代の始まりと考えるのか」という点を議論していきたいと考えています。そのために、まず前半で弥生時代、次いで後半では古墳時代前期の刀剣類の在り方を地域ごとにご紹介をいただきまして、刀剣類から読み解ける時代の特色や、地域間の関係、こういったものが弥生時代と古墳時代とどのように変化していったのか、こういった点を探ってまいりたいと思っております。

さて、早速ですけれども、先ほど石川先生のご講演でもありましたとおり、鉄製刀剣類は弥生時代に、朝鮮半島からまずは北部九州に伝わってきたわけです。ですのでトップバッターは福岡県の城門さんに、北部九州にはいつ頃、どのような鉄製刀剣類が伝わってきて、どのように広まっていったのか、地域のご紹介ということでお話しできたいと思っております。

【城門】 福岡県の城門でございます。私からは、北部九州における鉄製武器の出現と展開をお話しさせていただきますと思います。北部九州、今の行政区でいうと、福岡県・佐賀県・一部長崎県が入るような地域になりますが、地理的な特徴から朝鮮半島、先ほど石川先生からも中国大陸に最も近く、弥生時代を通じて、伝来品が最初に届くような地域ということになっております。また、魏志倭人伝に記されている、伊都国、そして奴国、まあ不弥国の場所は定かではないのですが、そういった国が確認されている地域という風になっております。

まず、最初に鉄製の刀剣類が入ってくるという時期になりますけれども、弥生時代の中期の頃、福岡市早良区の吉武樋渡墳丘墓というところでまずは初現がみられます。1番と書いてあるものが鉄製の剣でございますけれども、これが中期の中頃のものでございます。出土したものは墳丘墓と呼ばれる、古墳のような弥生時代のマウンドを持つお墓でございますけれども



も、その中央部から出てくる甕棺墓の中に副葬されていたものでございます。この吉武樋渡墳丘墓のなかでは、中期後半～中期末まで、鉄製刀剣が出てきますけれども、2と3の二つに関しましては、中期の後半、素環頭の刀と鏡、こちらは素環頭刀というものが出てきます。また、このほかにも、青銅製の武器がほかにも、武器関係が出てくるということで、少し見づらいかもしれませんが、図面の中に青色を付けて示してございます。中期後半になりますと、北部九州に広く鉄製刀剣分布するようになるのですが、代表例として、これも石川先生の発表に出てきましたけれども、中期の後半、飯塚市の立岩遺跡では剣や矛、ここには載っていませんけれども戈が出ております。また、那珂川市の安徳台遺跡というところでは、こちら鉄剣と、鉄戈になりますけれども、そういうものが見つかっているという状況になっております。ただ、基本的には北部九州の弥生時代中期には、青銅器の副葬が主体でございまして、大きく鉄製刀剣が広がるという状況にはないということになります。これが、どこで弥生時代の中で変わっていくのかともしますと、弥生時代の後期の後半くらいになると、鏡と素環頭刀のセットが成立するというような状況になってきます。



こちら、福岡県の東のみやこ町にあります徳永川ノ上遺跡の出土品です。鏡と刀、これに玉類が含まれますけれども、そういった副葬品が成立してくるという状況になります。さきほど、吉武樋渡墳丘墓の中でも、素環頭刀と鏡という副葬品の構成は見られたんですけども、そういうものが一般的に広がることはなくて、基本的にはそれが代々続いているというわけではなくて、ここから新たなセットとして再度伝来したととらえられるのではないかと考えております。また、宮若市の汐井掛遺跡というところでは、包丁のような形の鉄の刀も出ておまして、この辺後でちょっと話題になるかもしれませんが、一部国産かもしれないというものも入っているという状況になります。

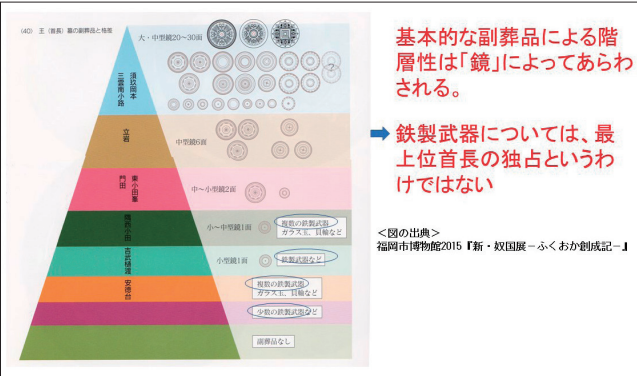
北部九州における鉄製刀剣の出土数

	刀	剣	ヤリ	鉞	戈
弥生中期	7	20	0	8	18
弥生後期	10	16	0	4	3
弥生終末～古墳初頭	9	24	1	0	0
古墳前期	69	133	14	12	0

戈は中期後半から後期前半のわずかな期間のみ分布

弥生時代を通じて刀及び剣が主体となり、ほとんどが副葬品として墳墓から出土する。

北部九州における鉄製刀剣の出土数を見ますと、こういった形になっております。基本的には、弥生時代と通じて刀または剣が主体となっております。ほとんどが副葬品として墳墓から出土するという状況になっております。先ほど、ちょっとだけ安徳台遺跡や立岩遺跡で触れました戈というものは、中期後半から後期前半のわずかな期間のみ分布しておまして、その後姿を消していくという状況にございます。



また、鉄製刀剣が副葬されるお墓のランクの話なんですけれども、基本的には一番上は、これも先ほど石川先生の話に出てきましたけれども、三雲南小路や須玖岡本遺跡といったところで、鏡の量によってあらわされるということになっておまして、鉄製武器の位置付けというものがこちらのほうの下のランクのほうに入ってくるということになっておまして、鉄製武器については、最上位首長の独占というわけではないというような状況にあるということが、北部九州の状況になります。

【君嶋】 弥生時代の中期の頃と申しますから、およそ紀元前3～2世紀でしょうか、そのころに朝鮮半島から北部九州に鉄の武器が伝わったところからこのディスカッションがスタートいたしました。

ここからですね、鉄製武器は東へ東へと広がってまいります。日本海ルート、瀬戸内海ルートを通してなんですけれども、まずは、日本海ルートのほうですね。さきほど石川先生のお話では、日本海ルートでは顕著な鉄製武器の流通が行われていたという話もありましたけれども、この日本海ルート、鉄製刀剣がどのように広まっていったのか、石川県の林さん、ご説明をお願いします。

【林】 石川県の林と申します。よろしくお願ひします。弥生時代中期中葉の北部九州へともたらされた鉄製武器は、続く中期後葉になると、西日本各地に広がっていきます。そのなかでも、山陰から北陸にかけての日本海沿岸域に、多くの鉄製武器が認められます。先ほど城門さんのお話にもありましたが、北部九州の鉄製武器は、お墓の副葬品が主体でしたが、同時期の日本海沿岸域で見つかる刀剣類は、すべて集落遺跡から出土する点が、大きな違いといえるかと思ひます。画像に示しました鳥取県倉吉市中尾遺跡では、左の竪穴建物の柱の穴のところに、“鉄矛”、そして“板状鉄斧”、“鑄造鉄斧”の3点の鉄器がまとまって見つかっております。矛は全長54.3cmあるのですが、鉄矛をはじめ、全てが、朝鮮半島もしくは中国大陸から海をわたって運ばれてきた“舶載鉄器”になります。さらに、左の石川県小松市の八日市地方遺跡では、おそらく、中国大陸で製作された図のような鉄剣を装着するための“把”が出土しておりまして、その他、日本海沿岸域では、鳥取市の青谷横木遺跡や、京都府京丹後市弥栄（やさか）町の奈具谷遺跡などから、非常に多くの鉄製刀剣の装具が見つかっています。このことは、日本海沿岸域で多くの鉄製武器が受容されたことを裏付ける資料になるかと思ひます。

北部九州にそれほど遅れることなく、鉄製武器が導入された日本海沿岸域では、鉄製刀剣の副葬が弥生時代後期前葉から始まります。鳥取市松原1号墓は、湖山（こやま）池という瀉湖、すなわち、天然の港湾を臨む丘陵上に築かれた墳墓で、墳丘上に見つかった4基の埋葬施設から、大量のガラス玉と鉄剣1点が見つかりました。この鉄剣については、それらの埋葬施設のなかで一番大きな第1主体部から、鞘（さや）とか把（つか）などの刀剣装具が装着された状態で見つかっております。

続く弥生時代後期後葉には、図にオレンジ色の四角で示しました日本海沿岸域で鉄製武器を副葬する墳墓が増加するとともに、分布域も非常に広くなりまして、北陸の東端に位置する新潟県村上市の山元遺跡まで到達します。導入された刀剣の構成は、図のような長い剣や刀が同数程度みられる山陰地域、そして複数の剣が主体となる北近畿地域、剣を単体で副葬するのが主流となる北陸地域という地域差を見出せますが、全ての地域に共通して、集落遺跡から少し離れた丘陵上に築かれた規模の大きな墳墓、すなわち、地域の有力者の墳墓に大型の鉄製武器が副葬されるという特徴が見出せます。副葬武器の主体となる刀剣は、鳥取県湯梨浜町の宮内第1遺跡などでみつかった長大な刀や、福井県若狭町向山B遺跡のような長剣のような舶載品が多く確認でき、北近畿よりも東の地域では、刃の下部にある関（まち）と呼ばれる部分に孔を2つあけた、刃関双孔鉄剣が多くみられます。

そして、古墳出現前夜にあたる弥生時代終末期には、山陰地域で素環頭を裁断した、図で示しますと、この非常に長い刀の持ち手部分に本来ついていた素環頭部分、それを裁断した可能性の高い“直刀”が多くなり、剣は減少していきます。一方、北近畿地域では、短剣が主体となった副葬、武器

刀剣のはじまりと広がり（日本海沿岸域）

・弥生時代中期後葉の日本海沿岸域に多く導入
※刀剣装具が多数存在（八日市地方遺跡）
※墳墓への副葬例なし

（中尾遺跡）
（写真・図）倉吉市教育委員会提供

刀剣副葬の開始（弥生時代後期前葉）

・短剣（鳥取県松原1号墓） ※湖山池南西岸に張り出す丘陵地
※京都府三坂神社3号墓からは、素環頭刀子が出土

（松原1号墓）
※鞘・把の一部が残存
＜写真の出典＞
財団法人鳥取市文化財団
2012『松原1号墓』

刀剣副葬の拡散（弥生時代後期後葉）

＜写真の出典＞
大原府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影』平成17年秋季特別展
（宮内第1遺跡）

北陸西部で刀剣増加（弥生時代終末期）

＜写真の出典＞
大原府立弥生文化博物館2005『北陸の玉と鉄 弥生王権の光と影』平成17年秋季特別展
（原目山墳墓群）

の構成に大きな変化が確認され、素環頭大刀や刀を副葬主体とするものが出現することに加えて、把を取り付ける部分である“茎（なかご）”が長い短剣が出現してきます。一方、北陸地域では、素環頭刀や、もしくはその環頭部分を裁断した鉄刀が副葬の主体となり、これに右上のような短剣が加わる組成が主流になります。富山市杉谷A遺跡で見つかったような、茎幅が狭くて、環頭が大きい素環頭刀は、この時期の北陸の特徴的な形態として指摘でき、同時期に素環頭大刀の副葬がみられない山陰地域との大きな違いとして把握できるのではないかと思います。

【君嶋】 北部九州からそれほど遅れることなく中期の後葉という時期にですね、矛が入ってきたりとか、あるいは木製装具の存在によって、かなりの程度、鉄製武器類が普及していたということがうかがわれるというお話でした。また、こういった図を見てもですね、先ほど石川先生から五尺刀、すなわち長さ120 cmほどの刀が、中国や北部九州でみつまっているという話がありましたけれども、それと比べても遜色ないような長い刀が非常に多いんだなという感想を持ちました。

さて、瀬戸内海ルートではどうだったのでしょうか。岡山県の石田さん、お願いします。

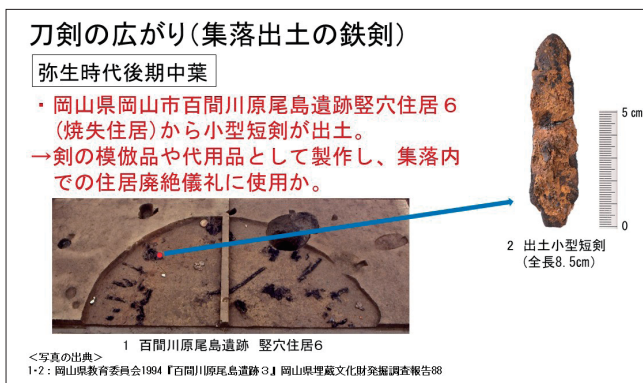
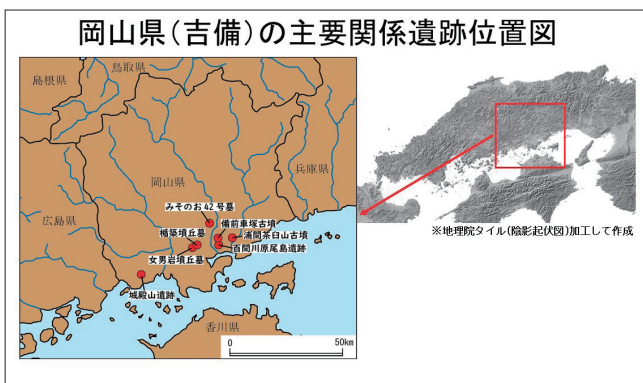
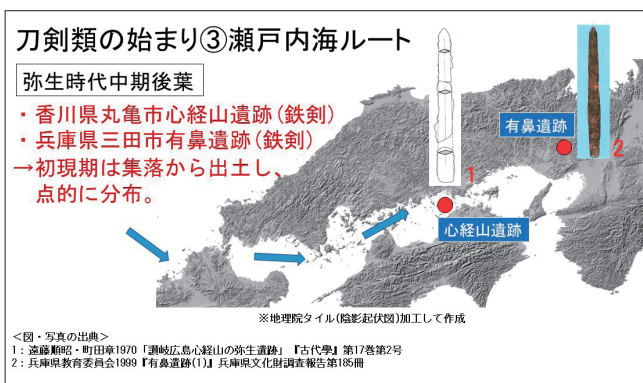
【石田】 岡山県の石田です。よろしくお願ひいたします。瀬戸内海ルートの刀剣のはじまりと広がりについて説明させていただきます。北部九州に鉄製の刀剣類が出現して、間もなくになりますが、弥生時代の中期後葉に資料が確認されております。一つは瀬戸内海のと真ん中になりますけれども、香川県丸亀市の広島島という島に位置します心経山遺跡で、長さ約30 cm程度の剣が出土しています。もう1点は、東のほうへ進みまして、瀬戸内海からやや内陸に入ったところになりますが、兵庫県三田市有鼻遺跡から長さ約23 cmの鉄剣が出土しています。心経山遺跡は山の上の遺跡で、有鼻遺跡は丘の上の遺跡ですが、これらの剣は、そういった山の上や丘の上の集落から出土しているのが特徴になります。瀬戸内海ルートにお

きまして、鉄製武器の初現期には、数もまだ少なく、点的に分布しているような状況です。

続きまして、刀剣の広がりについて岡山県の資料が中心になりますけれども、紹介したいと思ひます。まず、主要の関係遺跡位置図を示しておりますが、岡山県は瀬戸内海のほぼ中央部の北岸に位置してありまして、現在の岡山県と広島県の一部は、古くは「吉備」と呼ばれた地域になります。本日紹介する遺跡やこの後に出てきます古墳のほとんどは、岡山県の南部、現在の行政区分でいいますと岡山市と倉敷市の範囲になりますが、かつての吉備の中核と考えられる地域に、集中して位置しております。

まずは、刀剣の広がりについて吉備の例をもとにさらに紹介させていただきます。まず、集落出土の鉄剣について紹介したいと思います。時期は弥生時代の後期中葉で若干新しい時期になってまいります。岡山市の百間川原尾島遺跡から堅穴住居が見つかりまして、そこから小型の全長8.5 cmの剣が出土しています。この短剣ですが岡山県では鉄製刀剣類で最も古い資料になります。

短剣が出土した住居の写真をこちらに載せておりますが、この住居は焼失住居で、火事で焼けた住居になります。火事で焼けて炭になった住居の部材の上に短剣が乗った状態で見つかりました。この短剣ですが、非常に小型ですので、武器としては小さすぎて役に立ちません。恐らく、剣の模造品や代用品として製作されたのではないかと考えられます。集落内で住居を廃絶する際に、住居を燃やして、お祭りをしていたのではないかとという指摘もありますので、百間川原尾島遺跡では、集落内で住居を廃絶



する際に、意図的に住居を燃やして、ここでは「住居廃絶儀礼」としてありますが、そういった儀礼に使用されていた可能性があります。

続きまして、時期がさらに新しくなります。刀剣の広がり、墳墓への副葬ということで説明させていただきます。弥生時代後期後葉に岡山県の倉敷市に巨大な墳丘墓であります楯築墳丘墓が築かれます。横に復元図を載せておりますけれども、全長が約80mありまして、当時の列島では最大の規模の墳丘墓になります。円形の墳丘の両側に長方形の出っ張りのようなものがつきまして、墳丘の上や周りには大きな石が立てたり、並べたりしております。この楯築墳丘墓ですが、「吉備の王墓」と考えられておまして、吉備＝岡山で最初に鉄剣が副葬された墳墓になります。この楯築墳丘墓ですけれども岡山大学の近藤義郎先生を中心に発掘調査が行われております。中央に埋葬施設がありまして、その埋葬施設の大量の朱が敷き詰められた木棺の中から、長さ47cmの長剣と玉が副葬品として出土しております。この楯築墳丘墓以降になります。弥生時代の終末期にかけて、吉備を中心とした瀬戸内側の地域では墳墓への剣の副葬が広がりまして、今までわかっているところで10例ほどが確認できております。先ほど日本海側は、終末期以降は刀が中心に副葬されるということでしたが、瀬戸内のほうは楯築墳丘墓以降一貫して、お墓に副葬されるのは剣が主体となっておりまして、刀はほぼ無く対照的な状況となっております。

以上が、瀬戸内海ルートでの刀剣の始まりと広がりについての状況になります。

【君嶋】 お気づきの方多いと思うのですが、日本海側、瀬戸内側とも、鉄製刀剣類が伝わってきた当初は集落から出ているのですよね。この点は伝わってきた最初から墳墓に副葬されていた北部九州とは異なっている点かなと思います。さらに、先ほど紹介のありました岡山県の百間川原尾島遺跡、それから林さんから紹介のありました鳥取県の中尾遺跡、両方共ですね、火事で焼けた住居から出ておまして、住居廃絶儀礼との関係も考えられているという資料なんですね。この時代の武器は鉄製武器のほかにも、ご存じの方多いと思いますが、青銅の矛とか剣もありますけれども、これらはやがて巨大化してですね、祭器に変化していくわけなんですけれども、それから、鉄の武器についても、古墳時代になりますと、剣を石で模造して神にささげることが行われるようになってきます。刀剣類は個人が所有して武威を示すだけではなくて、伝わってきた最初から儀礼ですとか祭祀ですとか、そういう場面でも用いられていたんだということがここ数年の発見例からわかってきているということになるかと思えます。

さて、今日のパネリストの守備範囲はここまでなんですけれども、瀬戸内海ルートでの終点にあたる近畿地方の中心部、いわゆる畿内と呼ばれる地域ですとか、さらにその東の東海、中部山地、関東地方、こちらへは刀剣類はどのように広まっていったんでしょうか。先ほど石川先生のお話では長野県の遺跡のお話などもありましたけれども、ここで改めまして、関東地方の弥生文化を長らく研究してこられた石川先生、教えてくださいませんか。

【石川】 畿内も含めてということでしょうか。つらいなあ。といいますのも、今日話題にしてきました中期後半から後期にかけてかなり日本海中心に鉄製武器が普及しているということが見事に見えます。ところが、あえて“肝心の”といいます、畿内ではそれがほとんど見えてこない。大阪府の大竹西遺跡が後期の終末期まではいかない段階で鉄剣が出ている。これが数少ない鉄剣の畿内での出土例ということになるかと思えます。だから、畿内ではなかったといえるのかが一つ問題になると思います。そもそも鉄製武器の発見例、日本海側では集落からの発見例があるとしても、墳墓からの出土例がかなり目立つわけですね。畿内、東部瀬戸内といってもよいのですが、副葬品を墓に入れるという風習がそもそも希薄、弥生時代中期段階から希薄で、数が少ない。尼崎市の田能遺跡で、腕輪と玉があるくらいですよ。ということで、副葬品を入れないということが基本といったところでは、保有していたとしても墓には入らないというために、我々には見えないという可能性があるということも考えておいたほうが良いのではないかと思います。それから、お話を聞いてみますと、弥生時代後期よりも後期後半から終末期にもう一度鉄製武器が普及し、また副葬される状況が良く見えてくるんですけれども、その段階の墳丘が残っている墓、これが畿内ではほとんど確認できない。これも問題だと思えます。といいますのも、先ほどスライドでちらっとお見せしましたが、後期末から庄内期にかけて、前方後円形の墳丘を持ったお墓が畿内でかなり普及するわけですよ。例えばその最終段階の墳

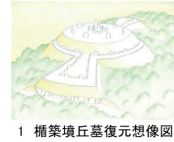
刀剣の広がり(墳墓への副葬)

弥生時代後期後葉

- 岡山県倉敷市楯築墳丘墓(全長約80m)で最初に鉄剣が副葬される。以後、終末期にかけて墳丘墓に剣の副葬が広がる。

→副葬されるのは剣が主体で、刀はほぼ無い。

<図・写真の出典>
1: 古代歴史文化協議会編2018『玉-古代を彩る至宝-』
2・3: 近藤義郎編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』



1 楯築墳丘墓復元想像図



2 楯築墳丘墓中心主体



3 楯築墳丘墓出土鉄剣(全長47cm)

丘 100mにも達しようという纏向石塚も墳丘が残っていなかったために副葬品はわからないわけです。あれが、鉄製武器を、長剣を持っていなかったとはとても考えられない。私はですね。そういうことからするとあれほどの纏向石塚ほどの規模ではないにしても、前方後円形の墳丘が畿内で普及し始めている、その段階にはある程度は楯築墳丘墓のような吉備方面と連動した武器副葬はあった可能性は考慮しておくべきだと思います。私たちはどうしても目に見えたものを議論する癖がついていますが、見えていないものをどれくらい予測して、議論を慎重に組み立てるのかということも目を向ける必要があると思います。それから東への鉄製武器の流通ですが、これは、私は圧倒的多数が日本海ルート、長野そして群馬、関東西部というこのルートが大動脈で、これが北陸山陰北部九州ルートとつながる。それに対して太平洋側というのは後期段階では希薄。ただし最終段階、庄内期といってもいいかもしれませんが、前方後円形の墳丘を持つ墓が普及する時点で、それとは別の太平洋側、畿内の新たな鉄製武器流通、副葬というものが新たにリセットされるという段階を踏んでいると思います。

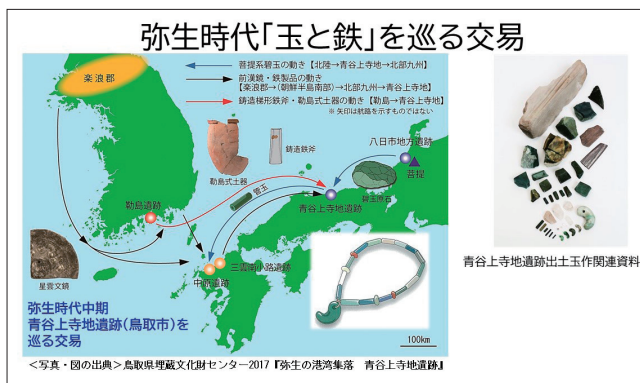
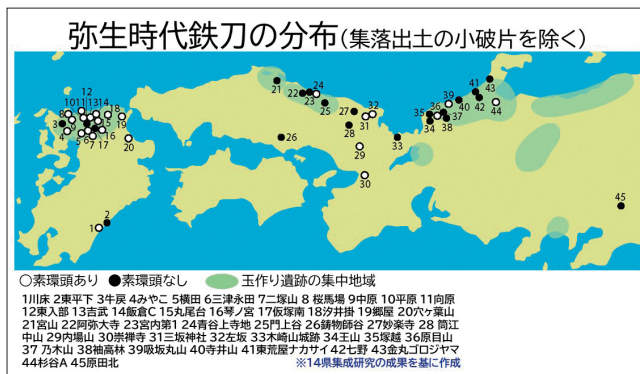
【君嶋】 ありがとうございます。東日本を含めて日本列島全体を考えてみますと、どちらかというと日本海ルートの方が、メインルートというお話だったかと思います。また、この後古墳時代の話をしてまいりませうけれども、古墳時代の畿内と呼ばれる地域の大型前方後円墳、そこに副葬された圧倒的な量の鉄製武器を考えますと、弥生時代にほとんど見つかっていないというのは、確かに意外な気はするんですけども、見えざる鉄器というんでしょうか、本当はあったかもしれないけれども、資料としては残っていない鉄製武器、それをただの想像ではダメなんだろうと思うんですよね、こうこうという根拠から、あったと考えられる、なかったと考えられる、こうした考え方をしていくことが、大事なんだろうという風に伺いました。ありがとうございました。

さてここまで、朝鮮半島から伝わった鉄製刀剣類が、日本列島にどのように広まっていったのかを地域ごとに見てまいりましたが、刀の多い日本海沿岸と剣の多い瀬戸内地域、あるいは、その地域の最有力のリーダー、いわば王様の墓に副葬される傾向があった日本海沿岸と、必ずしも最有力者が鉄製刀剣類を独占していなかった北部九州、こういった形で地域ごとの違いがあぶりだされてきたようにも思います。刀剣類から時代を読み解く際のカギはこのような地域性に隠されているような気がしてきましたので、もう少し深く考えていきたいと思います。

まず、それぞれの地域で刀が多いか、剣が多いかという問題から考えていきたいと思います。今出ておりますこの図（左図）は、今回の14県による研究成果を基に作りました。弥生時代の鉄刀の出土遺跡を示した図ですけれども、北部九州と日本海沿岸の山陰・北陸地域に集中しています。さらに、北部九州では素環頭が多く、山陰・北陸では素環頭を持たない、先ほどお話がありましたけれども、裁断して

しまったんでしょうかね、そういう刀が多いという違いも明瞭であります。

朝鮮半島に一番近い北部九州に多いということは納得できるのですが、次に多いのがなぜ日本海沿岸なのかということを考えてみたいと思います。鉄刀は弥生人の鍛冶の技術では作ることが難しく、ほとんどが大陸・朝鮮半島からの輸入品、つまり相当な貴重品であったらということ的前提にしますと、北陸・山陰の集団は貴重な鉄刀を手に入れる力を持っていたということがわかります。では、その力とは何だったのかという話なんですけれども、この図では、玉作りの遺跡が集中する地域を緑色で示しております。この玉作り遺跡が集中する範囲はですね、そのまま鉄刀の分布が集中する地域とほぼ重なるということがわかります。こちらは青谷上寺地遺跡を中心とした交易関係を示した模式図（左図）なんですけれども、鳥取市の青谷上寺地遺跡は青銅鏡や鉄器といった大陸・半島由来の貴重品が数多く出土しました、「地下の弥生博物館」とも呼ばれる、当時の交易拠点と考えられる遺跡です



けれども、この遺跡では、石川県で採れた碧玉、緑色凝灰岩といった石材を使って、玉作りをしていたわけですが。北陸産の石で作った管玉、首飾りですけれども、こういったものが北部九州の甕棺墓からたくさん見つかるわけでありまして、こういった、北部九州の有力者たちにとって、これらの北陸産の玉というのは、ぜひとも手に入れたいブランド品だったことが想像されます。このように、弥生時代の日本海沿岸では、山陰・北陸地方の特産品である玉と西方からもたらされる鉄とを交換する交易が行われていたと。鉄刀を入手できた日本海沿岸の力というのは、鉄の対価、見返りとなる玉を豊富に産み出す力であったと考えられるわけです。

ところで、福井県の三原さん、山陰と北陸といいますのは、玉作りが盛んであるという共通性の他に、有力者のお墓が共通することからも強い結びつきが窺える地域ですよ。

【三原】 福井県の三原と申します。北陸と山陰の交流でぱっと思いつくのが、四隅突出型墳丘墓といわれるお墓です。中心が四角い形をしておりまして、四隅がヒトデのように突出していることが特徴です。全国で100例ほど出ているそうなのですが、(山陰に)次いで北陸に多く見られます。丹後半島とか若狭、福井県でも南のほうは飛び越えて、北陸で多く分布しております。ただ、北陸では四隅突出型墳丘墓というのは、点的に分布しているだけでして、主体となるのは四角形の、方形の墳丘墓が主体となります。山陰のものは、図にあるようにグレーがかっていることがわかると思いますけれども、石を貼っているのですが、北陸のほうは少し変容した形で土をそのまま削り出して墳丘を作っていくというような状況になっております。

北陸の中で一早く入ってくるのは、福井県の北のほうですけども、福井平野の西部域の丘陵上に、弥生時代後期後半に小羽山30号墓というお墓が造られます。墳丘長30mを超えるような大型のお墓で、その地域を治めていた有力者のお墓であろうと考えられております。山陰と北陸の首長間の交流によって北陸の中でも四隅突出型墳丘墓が現れたと考えられております。

次いで先ほどの小羽山30号墓のほうから、刀剣類でいうと、剣が1点だけ出土しております。写真を見ていただくと鞘と把の装具を取り付けたままの状態が出土したことが分かります。こういった剣の形状ですとか厚さですね、そういったものを網羅的に比較された研究を参照しますと、同種の剣は北部九州の方にどうも集中するということがわかってきておりまして、日本海沿岸のほうに点々と分布しているということがわかってきております。先ほどお話ししました、四隅突出型墳丘墓では山陰と首長間の交流をもって作られていて、剣のほうも日本海沿岸を伝って北陸のほうに来ているという流通ルートが見えてきます。

弥生時代の後期のもう少し新しくなりました、弥生時代の終わり頃ですね。左側の図なんですけれども、四隅突出型墳丘墓は弥生時代終末期になっても先ほどから挙げております、小羽山墳墓群で作られていきます。ですが、小羽山30号墓では剣を1点副葬されておりましたが、終末期の四隅突出型墳丘墓に副葬されているのを見ると、図の縮尺があっていませんが、小さな鉄鏃ですね、鉄製の矢じりといったものですか、刀子という小型の鉄製工具を副葬するようになりまして、墳丘長も小型になっていきます。一見すると四隅突出型墳丘墓はここで衰退していくようにも見えているところですよ。同じころ福井平野東部

四隅突出型墳丘墓にみる北陸と山陰の交流

① 四隅突出型墳丘墓の分布域

- 北陸では、方形の墳丘墓を主とし、四隅突出型墳丘墓が点的に分布。
- 貼石を欠く。

⇒ 主な分布域となる山陰との首長間交流、墓制の導入。北陸最古は、小羽山30号墓。

● 全国で約100例、北陸で12例 DATA

② 福井市 小羽山30号墓

③ 永平寺町 乃木山墳丘墓

<挿入図>

①: 鳥取県古代文化センター1998『いにしへの鳥取 ガイドブック』 ②: 福井市立郷土歴史博物館 小羽山墳墓群研究会2010『小羽山墳墓群の研究-資料編-』 ③: 松井政信1997『発掘された北陸の古墳報告会資料集』

四隅突出型墳丘墓から出土した剣 - 弥生時代後期 -

① 小羽山30号墓

② 小羽山30号墓の鉄剣はどこから来たのか。北部九州？

③ 福井県 妙楽寺7号墓

⇒ 北部九州や日本海沿岸の墳丘墓から出土した剣との形態的類似。

<挿入図>

①: 福井市立郷土歴史博物館 小羽山墳墓群研究会2010『小羽山墳墓群の研究-資料編-』 ②: 杉山和徳2017『弥生鉄制備』『日本考古学』第43号 発表者加筆 ③: 豊岡市教育委員会2006『豊岡市 妙楽寺墳墓群』

四隅突出型墳丘墓と方形墓の鉄器 - 弥生時代終末期 -

① 福井市 小羽山墳墓群 (26・24・23号墓)

② 福井市 原目山2号墓

③ 福井市 塚越墳丘墓

④ 永平寺町 乃木山墳丘墓

⇒ 四隅突出型墳丘墓の衰退、方形の墳丘墓へ大型武器の副葬

首長間のネットワーク：山陰、北部九州→船載品への変化

<挿入図>

①・②: 福井市立郷土歴史博物館 小羽山墳墓群研究会2010『小羽山墳墓群の研究-資料編-』 ③・④: 福井市1980『福井市史 資料編1 考古』佐々木勝2002『福井県の鉄製品の様相-北陸地域の墳墓出土資料を中心として-』『平成13年度環日本海交流史研究集会 鉄器の導入と社会の変化』財団法人石川県埋蔵文化財センター

に大型の方形の墳丘墓が作られていきます。その中に先ほど、林さんからも話があったように、大型の刀剣類を複数もつような墳丘墓が出現してきます。墳形によって大きく鉄器の様相が変わってきているという状況が見えてきたところです。

【君嶋】 墳丘の形の違いに対応して、副葬されている刀剣類の顔つきも違っているというお話でしたけれども。そうなりますと、先ほどの石川先生の御講演で広域交流の中には普通の交易とは別に、首長間交渉という交流があるというお話がございましたけれども、刀剣類はまさに、例えば「贈答」贈り物でありますとか「下賜」といった、首長層どうしの交流によってもたらされていたという可能性も見えてくるように思います。このあたりは、必ずしも最有力者が独占していたわけではない北部九州とまた違った、刀剣の動き方かなと思います。さて、今の林さん・三原さんのお話を総合しますと、北陸は初めから刀の方が多かったわけではなくて、弥生時代の終末期になってから刀のほうが増してきたということのようなのですけれども、林さん、その理由についてはなにかお考えがありますか？

【林】 少し画面に示した表の文字が小さくて見えづらいのですが、弥生時代後期後葉から終末期にかけて、北陸の墳墓に副葬された刀剣類を表でまとめてみました。赤線から上が弥生時代の後期後葉、下が終末期の墳墓で、剣が緑、刀が赤、素環頭刀をオレンジ色で示しています。赤線より上の後期後葉では、緑色で示した剣が多く、終末期には、素環頭刀や刀が多いということが、ご理解いただけるかと思います。ちょうど、この時期といえますのは、朝鮮半島東南部の嶺南地方で、それまで武器の主体であった“短剣”が減少し始め、その代わりに手持ちの武器として“素環頭大刀”や“長剣”、そして長い把を取り付ける武器としては“矛”が主流となっていきます。日本海沿岸域、特に北陸地域で顕著にみられる素環頭大刀や刀の増加は、このような朝鮮半島で生じた鉄製武器の消長、移り変わりをダイレクトに反映している可能性が高いのではないかと考えております。

遺跡	所在地	形状	規模	遺物	時期	素環頭	刀	剣	サリ	鉄	銅	金	銀	ガラス	その他	出典	備考	
山田遺跡	福井県越前市			SK02	後期後葉		1	1										
山田遺跡	福井県越前市			SK08	後期後葉		1	1										
山田遺跡	福井県越前市			SK09	後期後葉		1	1										
外山山30号墓	福井県福井市	方形	33×27	後期後葉	終末期		1	1							ガラス小玉1、ガラス小玉10、碧玉管玉103		の関原丸、鉄、銅、漆	
竹山丸墓5号墓	福井県福井市	方	17×14	第2層部	後期後葉		1	1										銅剣(布志)
曹井山6号墓	石川県能登町			1号土坑	後期後葉		1	1										布志
曹井山6号墓	石川県能登町			2号土坑	後期後葉		1	1										布志、方陣板瓦の可成り
北山5号墓	福井県鯖江市	方	11×10	後期後葉	終末期		1	1										
石山山1号墓	福井県福井市	方	20×20	後期後葉	終末期		1	1										
石山山2号墓	福井県福井市	方	30×30	1号土坑	終末期		1	1										
石山山2号墓	福井県福井市	方	30×30	2号土坑	終末期		1	1										
石山山2号墓	福井県福井市	方	20×30	4号土坑	終末期		1	1										
石山山2号墓	福井県福井市	方	30×30	5号土坑	終末期		1	1										
石山山3号墓	福井県福井市	方	10×10	1号土坑	終末期		1	1										
石山山3号墓	福井県福井市	方	7×9	3号土坑	終末期		1	1										
福屋山1号墓	福井県永平寺町	方	10×9	第2層部	終末期		1	1										
乃木山墳丘墓	福井県永平寺町	方	24×24	第1層部	終末期		1	1										
乃木山墳丘墓	福井県永平寺町	方	24×24	第2層部	終末期		1	1										
飯坂山10号墓	石川県加賀市	方	11.4×6以上	後期後葉	終末期		1	1										
七ツ塚1(甲)号墓	石川県加賀市	方	20×20	後期後葉	終末期		1	1										
七ツ塚1(乙)号墓	石川県加賀市	方	20×20	後期後葉	終末期		1	1										
七ツ塚2号墓	石川県加賀市	方	18×17	6号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚3号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚4号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚5号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚6号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚7号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚8号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚9号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚10号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚11号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚12号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚13号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚14号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚15号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚16号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚17号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚18号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚19号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚20号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚21号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚22号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚23号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚24号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚25号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚26号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚27号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚28号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚29号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚30号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚31号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚32号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚33号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚34号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚35号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚36号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚37号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚38号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚39号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚40号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚41号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚42号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚43号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚44号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚45号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚46号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚47号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚48号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚49号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										
七ツ塚50号墓	石川県加賀市	方	11×9	1号土坑	終末期		1	1										

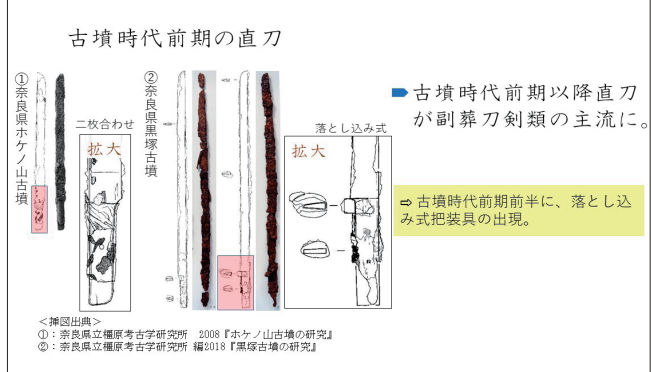
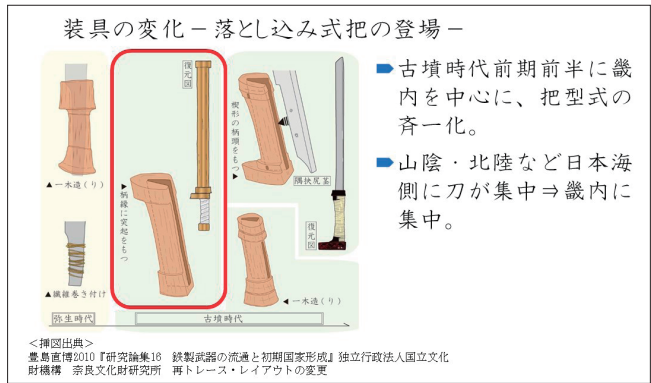
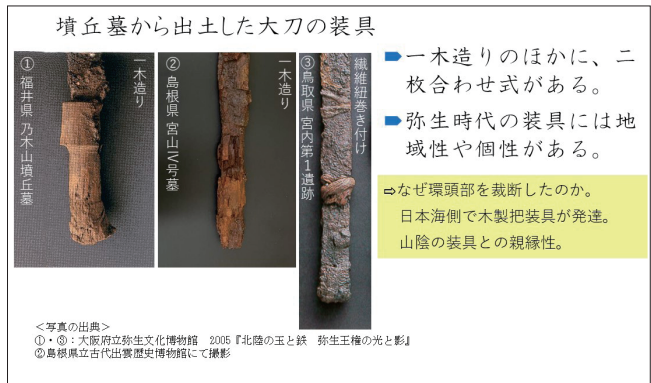
【君嶋】 興味深い話ですね、やはり朝鮮半島と海を隔てて向かい合っている日本海沿岸だからこそ、こういったふうに朝鮮半島と連動して「剣から刀」へという変化が起こったと言えるかもしれませんね。ただ、それほどですね、中国大陸や朝鮮半島と緊密な結びつき、交流があったのに、日本海沿岸では、なんで大陸との結びつきの象徴ともいえる素環頭大刀の環頭部を截断してしまったのか、という点がやはりちょっと気になってきます。三原さん、これは刀の把の部分の装具=こしらえとも関係する問題ではないかと思いますが、解説をお願いできますでしょうか。

【三原】 はい。先ほど林さんのほうからもお話がありました通り、素環頭部截断というのが行われているということが以前から考えられてきました。その一例として福井県の乃木山墳丘墓を取り上げて解説させていただこうと思います。当時の日本列島では、重厚な刀というものが生産できなかったということで、中国や朝鮮半島の刀が列島に舶載されていたと考えられております。奈良県の黒塚古墳に素環頭大刀が出ていますが、直刀のお尻の部分に小さい輪っかを付けているということがわかります。山陰や北陸ではこういった輪っかを切断し、一文字尻の直刀として使っているものが多いということがわかってきております。乃木山墳丘墓のほうで③と書いている部分にC字状の鉄が刀にくっついているというのがわかると思います。写

真で見ますとこちらの部分にC字になっているのがわかると思います。C字が素環頭の一部でございまして、刀のお尻の部分に接合するということが、わかっております。X線写真も見ますと赤い矢印のほうで指していますように、少しわかりにくいのですが、左右に不自然に広がっているというのがわかるかと思えます。素環頭の一部のところが切れた状態で残っておりまして、切った部材も一緒に乃木山墳丘墓のほうでは副葬品として供えているという事例があって、素環頭部を裁断していたということが裏付けられてきております。

では、先ほど君嶋さんからも投げかけがございましたけれども、なぜ環頭部を裁断してしまったのかということですが、一概には言えない大変難しい問題なのかなと思っておりますが、山陰と北陸では先ほどからずっと挙げております、乃木山墳丘墓では木製の装具というものが出土しております。島根県でも宮山IV号墓からも木製装具が出土しています。腐ってしまっただけで分かりにくいのですが、作り方が良く似ています。四角く把間部分に穴をあけて一木で作るというやり方が福井県と山陰のほうでよく似ている造りをしているということがわかっておりまして、ここに素環頭があると装具が取り付けにくいというのが一つの理由なのかなという風に考えております。

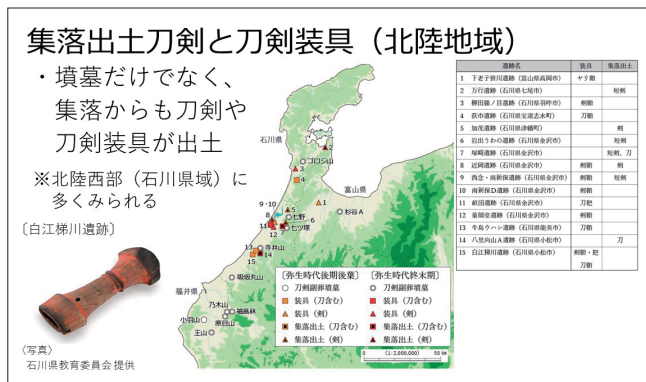
古墳時代の方にちょっと先走って話してしまうと、先ほどから北陸や山陰で見られる木製の把は、地域性があるって、各地域で作っていたものが、古墳時代に入りますと、赤い四角で囲った部分ですが、把の縁の部分が一木側ででっぱった形になりまして、背中の方に溝を掘って、ここに茎の部分を入れて装具を装着するという方法に古墳時代前期以降統一化されていく状況がわかってきました。この方法を落とし込み式というふうに呼んでいます。各自が各地域で作っていた装具が古墳時代に入り、ヤマトが中心となって社会の秩序を作っていた中で、もしかしたら畿内が一定の方法をもって、装具を作るようになった段階に変わっていったということがわかります。どこで落とし込み式が現れたのかといえますと、最古級の古墳の一つだと考えられております奈良県桜井市のホケノ山古墳では、茎尻のほうを見ていただくと、直刀が出現しておりますが、把の装具を見ますと二枚合わせ、二つの部材を、茎を挟み込むようにつけて装具にしております。ホケノ山古墳からその次の次の段階くらい、前期前半の中に収まりますけれども、奈良県の黒塚古墳に把の装具がありまして背が開いている状況がわかると思います。そして、片側に飛び出しているということがわかり、先ほどの復元図と共通する状況になっておりますので、古墳時代の開始とともに落とし込み式が始まったわけではなくて、今の状況からは少し遅れるのかなと考えられるのかなと思います。



パネルディスプレイ

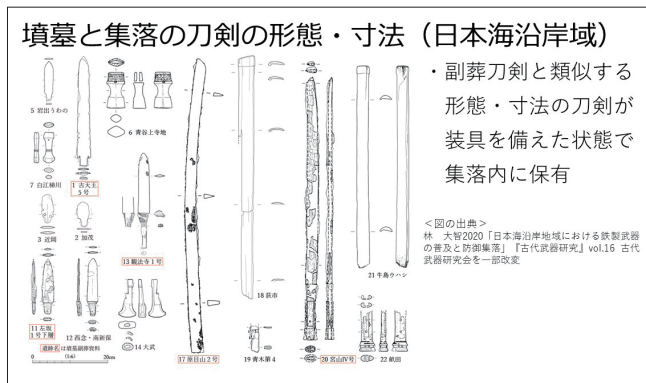
【君嶋】 写真とイラストで大変わかりやすい説明でした。林さん、今のお話にあった木製の装具は、北陸地方ではお墓以外にも集落から実際に出土しているそうですね。少しご紹介いただけますでしょうか。

【林】 弥生時代後期後葉～終末期の日本海沿岸地域では、鉄製刀剣が副葬品として墳墓から出土するだけでなく、低地の環濠集落や比較的規模の大きな集落で確認でき、そのうえ、それらの刀剣に装着されたであろう鞘や把などの刀剣装具も多く見つっています。提示した図は、集落出土刀剣と刀剣装具の出土地点を図で示してみたのですが、同時期の北陸地域では、石川県域を中心に11遺跡13例の刀剣装具が見つかっていて、写真であげた、石川県小松市の白江梯川遺跡から出土した鉄剣の把、鉄剣の手で握る部分には赤色の顔料である「朱」が塗られており



同時期の北陸地域では、石川県域を中心に11遺跡13例の刀剣装具が見つかっていて、写真であげた、石川県小松市の白江梯川遺跡から出土した鉄剣の把、鉄剣の手で握る部分には赤色の顔料である「朱」が塗られており

これらの集落出土刀剣と装具をあわせた武器の構成というは、下の表で示しますように、集落で若干“短剣”が多いという特徴は見られますが、弥生時代後期後葉から終末期に“剣から刀へ”と変化する副葬刀剣の変遷に対応しまして、集落で見られる刀剣は、後期後葉に割と剣が多くて、終末期に刀が増加するという集落と墳墓の刀剣が似通った器種構成となっていることを読み取れるかと思えます。なお、北陸地域の刀剣装具は、続く古墳時代前期にも継続して認められまして、小松市千代・能美遺跡では、同時期から増加し始める“ヤリ”の鞘も確認でき



たような、舶載の長大な刀に対応する装具も集落から見つっています。どうも北陸地域を中心とした地域では、朝鮮半島や大陸から運び込まれた素環頭大刀や刀を主体とする副葬品と同等の形態・サイズの刀剣、そして短剣が装具を備え、使用可能な状態、すなわち有力者が佩用、身に帯びることができる状態で、集落内に保有されていたことをうかがい知ることができるかと思えます。

【君嶋】 三原さん、林さんから、日本海沿岸では刀の把ですとか鞘ですとかそういった木製装具が発展したという話をいただきました。確かに、これだけ立派な把があれば、環頭部は邪魔だから切ってしまう、という発想が出てくるのもわかる気はしますけれども。ただですね、先ほど三原さんに出していただきました写真にもありましたように、鳥取県には、縄を巻き付けただけの把もあります。そういった刀でも、やはり環頭部を裁断しているわけですので、木製装具が理由のすべてではないとも考えられ、三原さんもおっしゃられていた通り、なぜ環頭部を切ってしまったのかというのはなんと難しい問題ではあるところ

ただ、弥生時代の刀や剣の把には、北部九州の素環頭刀、日本海沿岸の木製の把というように地域性があつた、地域それぞれの自己主張が把に表れていたということは言えるのではないかと思います。また、

三原さんのお話にてでまいました「落とし込み式」の扱は、古墳時代になりますと地域を越えて日本列島の広い範囲に広がってくるということで、後ほど古墳時代の議論をする時までこのことは覚えておきたいなと思います。

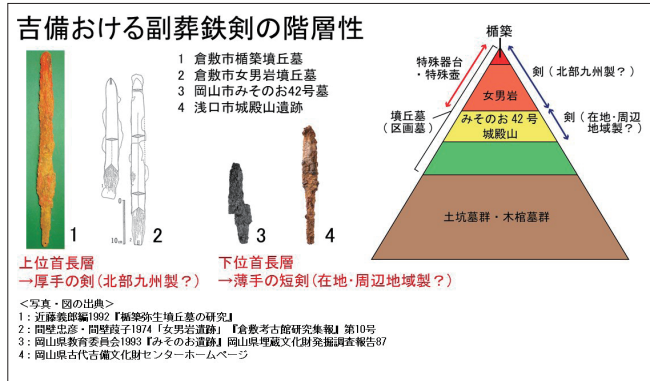
さて、ここまで日本海沿岸に刀が集中する理由について考えてきたわけですが、大陸・半島に向かい合う地理的条件ですとか、「玉と鉄」を巡る長距離交易の存在など、刀の入手ルートの特性がこのような分布を生んだという可能性が見えてきました。それでは、刀がほとんどなく剣が多いという瀬戸内側ですが、石田さん、同様の視点から考えることができますでしょうか。

【石田】 瀬戸内側の様子ですが、弥生時代の後期から終末期にかけて墳墓に主に鉄剣が副葬されます。その吉備の鉄剣副葬の状況を、より詳しく説明させていただきたいと思います。吉備では副葬される鉄剣に階層性が認められるようです。図の右側に三角のピラミッドの図を示しておりますが、吉備の中では墳墓の中でもランクがありまして、有力な首長層などは、主に上のほうになりますが、墳丘墓や区画をされた墓をつくっています。また、先ほど石川先生のご講演でも触れていただきましたが、吉備では特殊器台・特殊壺というお祭り用の土器を楯築墳丘墓以降、葬送の祭りに使っておりますが、特殊器台・特殊壺を持つような墳墓が、吉備ではよりランクが高いということがわかっております。そのランクの高い首長層の墓は、吉備の王墓である先ほど紹介いたしました楯築墳丘墓です。楯築からややランクは下がりますが、倉敷市の女男岩墳丘墓が楯築墳丘墓の近くにあります。そういった墳墓に鉄剣が副葬されています。1番の写真が楯築墳丘墓 47 cmの長剣、2番は女男岩墳丘墓から出ております短剣の実測図になりますが、長さ 38 cmと 25 cmの2本の短剣が出土しております。これら楯築墳丘墓・女男岩墳丘墓から出土した鉄剣は、厚手の長剣もしくは短剣で、北部九州で製作されたのではないかと指摘があります。

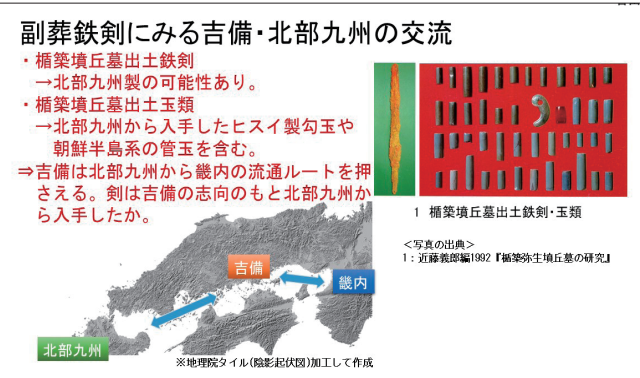
一方、トップのランクからやや下がった首長層、吉備では特殊器台とか特殊壺を持たない階層になりますけれども、そういったところの墳墓にも鉄剣の副葬がみられます。それらの写真を見ますと、3番の岡山市みそのお42号墓の短剣、長さ 16 cmほどですね、そして4番、これは岡山県の浅口市の城殿山遺跡から出土しております鉄剣で長さ 20 cmほどになります。いずれも薄手の短剣でありまして、これらの下位の首長層もっている短剣に関しましては、おそらく在地か吉備の周辺地域で製作されたものを、首長が入手して副葬しているのではないかと考えられます。

続きまして、副葬鉄剣に見る吉備と北部九州の交流について考えてみたいと思います。先ほど、吉備の上位の首長層に副葬された鉄剣は、北部九州で作られた可能性があるものを含んでいるのではないかと話をさせていただきましたが、先ほどから紹介しております楯築墳丘墓からは、鉄剣と共に玉類も出土しております。一緒に出土した玉類の写真を載せておりますが、真ん中にありますヒスイ製の勾玉は北部九州製で、下半分の青みがかった管玉に関しましては、朝鮮半島系のものではないかと考えられて

おりまして、これらについては鉄剣も含めて北部九州を介して入手したものではないかと考えられます。先ほどから日本海側の地域の話をしておりまして、大陸や半島に近いという立地もあり、最新の文物に触れる機会が多いのでしょうか、先駆的な感じで、刀という大陸系の最新鋭の武器を選択して副葬しているように感じますけれども、吉備をはじめとする瀬戸内海側におきましては、どちらかというと伝統的で、弥生時代中期後半に入ってきて広がった武器である剣を、瀬戸内側、吉備の首長層は志向して、楯築墳丘墓以降のお墓には、剣の副葬が主体になってくるというような状況です。こういった吉備の上位の首長層の剣が欲しい、墓には剣を副葬したいというニーズに応えてくれる地域といたしましては、瀬戸内海のルー



<写真・図の出典>
1: 近藤義郎編1992『楯築弥生墳丘墓の研究』
2: 岡野忠彦・岡野良子1974『女男岩遺跡』『倉敷考古学報告』第10号
3: 岡山県教育委員会1983『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告07
4: 岡山県古代吉備文化財センターホームページ

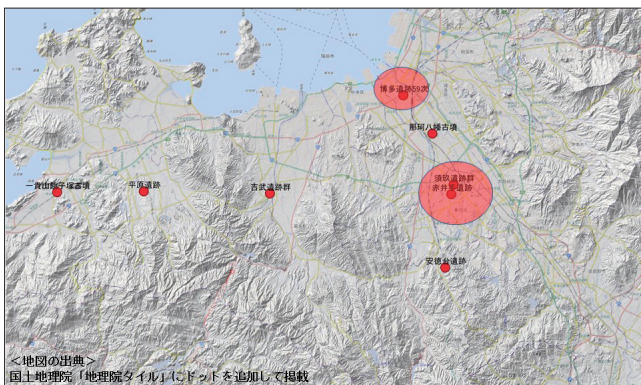


パネルディスカッション

トで昔から交流が深く、大陸・半島からの窓口でもあり、当時、最新の文物を手に入れ、おそらく、鉄器製作でも高い技術を持っていた北部九州であったと考えられます。また、日本海側では「玉」が鉄製の刀剣類の対価・見返りだというお話がありましたが、吉備で考えられるものの一つとして、岡山と香川の間に備讃瀬戸という地域があるのですが、その地域では弥生時代中期後半以降になりますけれども、土器製塩、塩づくりですね、そういったものが盛んにおこなわれております。吉備の特産品、交易品として候補に挙がるものとして、この塩がありますが、塩の交易も含めて、吉備は、当時の北部九州から畿内の流通の大動脈であった、瀬戸内海のちょうど中央部、要所に位置してありまして、吉備の首長層は、恐らく瀬戸内海ルートを使った流通に関与して、あるいはその流通を要所で押さえるなどして、北部九州からの鉄剣や玉などを獲得していたのではないかと、一部想像も含みますが考えられます。

以上が、吉備の話が中心になりましたけれども、瀬戸内海側の鉄剣の様相になります。

【君嶋】 先ほどの石川先生の御講演では吉備と出雲の結びつきについてもお話がありましたけれども、日本海側と違って、朝鮮半島と直接アクセスができない瀬戸内側の吉備の勢力は、外来の鉄製武器でありますとか、そのほかいろいろな物資を手に入れるために、いろいろなチャンネルを駆使していたということがうかがえるお話だったかと思えます。また先ほどの鉄刀はですね、ほとんどすべてが舶載品、海の向こうから来たという前提で考えていましたけれども、鉄剣のほうは北部九州産や在地産というお話が出てまいりまして、これはあるいは列島で弥生人が作って広がっていたのではないかということになりますけれども、当時、日本列島で最も鍛冶技術が進んでいたのは北部九州ということになりますので、これは城門さんに伺ってみたいのですが、北部九州での鉄器づくり、こういった鉄製刀剣の生産はどのように行われていたのでしょうか。



<地図の出典>
国土地理院「地理院タイル」にドットを追加して掲載

【城門】 北部九州での鉄器生産の話になりますけれども、先ほどの地図よりちょっと近づいて、奴国の領域になっていきます。ここに青銅器の生産も行ってた須玖遺跡群というのがありますが、そこで、鍛冶関連の遺物が見つかっておりまして、鉄鍬のような小型の製品は少なくとも作っていたことは間違いないということが言えるかと思えます。また、同じ春日市の須玖遺跡群の近くにありますが、赤井手遺跡では、住居の中から鍛冶炉が見つかっておりまして、また素材とみられる板状の鉄斧が見ついているというところで、まずは遺構からみた状況はこのようになっております。

続きまして、遺物についてですけれども、こういった鉄戈、また一部の剣もそれに含まれるといわれておりますけれども、朝鮮半島にはみられない、列島独自の形態というものがある。そういったところで北部九州での生産が想定されているという形になっております。また、古墳時代に入りますけれども、福岡市の博多の地下に眠っております博多遺跡群では、羽口でありますとか、ここでも同じように鍛冶関連の遺物というのが出土している状況があるところです。また、かなり大型の砥石も見つかっておりまして、その砥石を使うには小型のものでは大きすぎるというところから、刀剣の生産というのも想定されている状況になっております。ただ、一方で、本当に剣や刀を作っていたんですかということになってきますと、刀装具などが見つかっていませんので、先ほどの石川先生の御講演でもありました、「見えないものをどう評価していくのか」というところが

北部九州における刀剣の生産

- ・須玖遺跡群
- ・赤井手遺跡

弥生時代では、奴国の中枢で、鍛冶関連遺物や鍛冶炉が見つかる。

<写真・図の出典>
1: 春日市教育委員会2011『須玖岡本遺跡』春日市文化財調査報告書第61集
2~4: 春日市教育委員会1980『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書第8集

北部九州における刀剣の生産

- ・門田遺跡
- ・博多遺跡

古墳時代博多遺跡などで羽口などの鍛冶関連遺物が出土

刀剣の生産が想定される。

戈のほか、一部の剣
朝鮮半島では見られない列島独自の形態
北部九州での生産が想定されている。

ただし、刀装具などは見つかっておらず、「刀剣」の生産については状況証拠。

<写真の出典>
1: 福岡県教育委員会1978『山崎新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第9集』
2: 福岡市博物館2015『新・奴国展—ふくおか創成記—』

かなり大きな課題にはなっているのですが、状況としてはそういう状況がみられるというところでありませう。

【君嶋】 状況証拠ということではございますけれども、ただ、日本列島独自の形があるということで、確からしさという点では高いのではないかなと私は聞いておりました。今後新たな証拠が見つかるのか、研究の進展が楽しみな分野ではないかと思えます。

さて、先ほどの石川先生の基調講演では、広く東アジアを舞台とする広域交流の重層性についてお話をいただきました。このディスカッションでも、前半はですね、交流や交易といった視点を軸に、ここまでお話をしていますけれども、弥生時代のまとめという意味も込めまして、改めて、交流・交易の視点からみた弥生時代の鉄製刀剣類の特質というものについて、ここで石川先生にコメントいただきたいなと思えます。

【石川】 ずいぶん難しいコメントの求め方ですね。困ったな。皆さん方のお話を伺って感じたことということで、コメントの手前になるかと思えます。北部九州、弥生時代後期後半にかなり普及し、副葬品としても入り始める、大陸、楽浪郡の進出を含めて、中国系の素環頭を含めて、武器類が朝鮮半島に流通し、それが北部九州まで、ほとんどリアルタイムで入ってきて、墓に入ることがすごくよく分かったと思えます。しかしながら、中期後半段階ですと、有力者の墓には鏡は入るけれども、実は鉄製の武器の大物は入ってこないというのは、大陸の本来の在り方とだいぶ違うなど、考え方含めて受け止め方を自分たちの社会でどう位置付けするかというのは少し違うのだなということを感じました。それから、もっと東側に行きますと、鳥取県の中尾遺跡ですか、それと瀬戸内の心経山遺跡と有鼻遺跡、中期後半段階に小型でありますけれども、集落などでそれらが見つかる。墓では副葬されるという状況ではないとしても、やはり北部九州と時期的に、細かい編年的な問題はあっても、リアルタイムで、九州だけではなくてですね、大陸に由来する鉄製の武器類が瀬戸内側、山陰側にもかなり入り込んでいるということだと思います。これは、武器で取り上げておりますけれども、林さんなんかはずいぶん頑張っておられるように、利器としての鉄器の流通では、その前段階、中期の前半～中頃にかけてかなり大陸系の鉄製利器が流通していることを考えると、全然違和感がないと思うんですね。今日は後期に焦点を当てた広域交流の話をしましたけれども、中期後半までさかのぼって経過を見る必要があるということを考えました。それから皆さんのお話を伺って感じるのは、やはり後期後半をそれ以前と切り分けて別な目で鉄製武器の生産も含めた、九州は別かもしれませんので九州を除くと、鉄製武器の生産流通、それから副葬する刀などの採用という、少しそれまでとだいぶ違う、弥生時代の後期の前半と後半、ましてや中期後半とは分けてきちんとわけて、追跡しないといけないうことなどを改めて感じました。

【君嶋】 ありがとうございます。中国大陸や朝鮮半島を含めた、広い東アジアという広域流通の中で、鉄製品、鉄製武器の動きを考える必要があるとともに、また大陸や半島とも異なる弥生人、倭人独特の刀剣類にこめられた想いといったものも表れている。そういった複眼視的な視点から見ていく必要があるなという風に伺いました。

ここまで弥生時代中期に朝鮮半島から日本列島に刀剣類が伝わってきてから、弥生時代の後期を通じてどのように日本列島に鉄製武器が広がっていったのかということを見てまいりました。交易・交流の視点から、鉄製武器の広がりが地域ごとの特質をもって、地域性を生み出す形で広がっていったということを追うことができたのではないかと思います。後半ではいよいよ古墳時代のお話に移っていきたくと思えます。

刀剣類からみた古墳時代の幕開け

【君嶋】 では、ここから後半、いよいよ古墳時代の話に入っていきたいと思えます。冒頭でお話しましたように、刀剣類の在り方は弥生時代からどのように変わったのか。その変化は、社会全体や地域関係の変化とどのように関係しているのか、といった点を探っていきたいと思えます。

はじめに、そもそも古墳時代とはどのような時代で、いつ、どのように始まったのか。詳しい方はですね、大和盆地、現在の奈良県に大きな前方後円墳が登場して古墳時代が始まったということをお聞きかもしれませんが、石川先生、古墳時代に刀剣類はどのような意味を持っていたのか、先ほどの御講演では五尺刀などの話も出てきましたけれども、東アジア的な視点も踏まえて、教えていただけますでしょうか。

【石川】 私、教室で学生の質疑を聞いているときに、難しい質問を投げかけられた時に、みんなともに受けるんですよね。そういう学生には自分が答えられない質問が来たら、逆襲するのだと、それも一つ有力な対応策だということもいつも言っているのです。ですから、こういう難しい質問が来た時には、君嶋さんあなたはどう考えているのですかという、それを発言してから質問しなさいというそういうやり方もあるのですが、そうもいきませんね。

なかなか難しいのですが、畿内中枢ですと私の図式的な理解では最初期の有力古墳には必ず、鏡重視といますけれども、鏡と長物の剣・刀のセットが入り、さらに工具類も入ってくる。基本形があると思います。ですから、畿内中枢の大型の、箸墓古墳は内容がよくわかりませんが、当然そういう状況、セットが確立しているという意味では最有力者はそういうものであるということが定式化している。それがどのように出来上がったかというときに、一つの図式としては、五尺刀は非常に面白いと思うんです。鏡よりもあげる側＝魏の側は、おそらく後漢もそうでしょう、長物の刀というのは、やはりより上位の価値付けをしている可能性が高い。それに類した受け止め方をしている。ただし、変わっている可能性がある。それは古墳の中で、難しいと思うんです。鏡は遺骸の周りに配列し、そして黒塚ですと一時期古い小型の画紋帯神獣鏡を頭のところに置くという、配置や鏡の種類から読み解く手がかりがあると思うんです。ところが刀剣類は、そこまではなかなか難しい。でも、鏡とは違う、どう扱われているのかということ、もう一回、従来鏡だけで議論、悪く言うと鏡で議論を組み立てていた部分があると思うんですけれども、そうではないかもしれないという目で、検討してみる必要があるんじゃないかと。もうやられているかもしれないのですけれど、僕が理解していないだけかもしれないのですけど、そういう目が必要。それから、先ほどちょっと話をし忘れたのですが、こういった話題の時に東大寺山の中平年銘鉄刀が、中平年は180年代なので、卑弥呼に近い時期、土器編年で行くと、5様式後半～末に考える人もいれば庄内の前半で考える人もいるんじゃないかと思うんです。その段階に受け入れた。しかしながらその時期に畿内では墓では少なくとも長物は確認できないわけですね。今のところ。古墳は前期後半、伝統的な言い方をしますと4世紀後半、100年以上もの、150年ものタイムラグがあるわけですね。それをいわゆる伝世鏡論と同じように、早い段階に奈良盆地に入ってきて、受け入れて、そして役割を終えて墓に入るという説明でよいのかどうかということももう一度考える必要があると思います。その時に、断ち切っているということもですね、先ほどからの環頭を断ち切るということと、中平年銘鉄刀を一連のものとして扱ってよいのかというのはかなり大きな問題ですね。しかも、断ち切りというのがどこで行われているのか、それが奈良盆地にもたらされたのがいつかという時期も変わりますし、かなり大きな問題をはらんでいると思うんです。教えてください。私はわからないので、本当に教えてほしい。今日のお話伺ってものすごい重要だなということを改めて感じました。

【君嶋】 ありがとうございます。先生から逆襲されて、私がしゃべらなきゃいけないのかなとドキドキしましたが、先生にお答えいただきました。やはり、五尺刀の話にありましたように、中国的な論理では刀が鏡よりも重要なもの、日本に伝わってきて、鏡と逆転している様相はありますけれども、それでももともと刀というものがそういった意味を持っているものだということを念頭に、それが、畿内の大型前方後円墳に多量に副葬されているということを前提に考えていく必要があるかと思えます。また、素環頭の裁断ですね。弥生時代の先ほど議論しました弥生時代の論点ですが、古墳時代にも引き続き考えていかなければならない問題として受け止めたいと思えます。

【石川】 君嶋さんごめんなさい。もう一言。さきほどから長物の鉄刀がどういう風に扱われていたのかという事例を伺いますと、トップクラスの、魏志倭人伝や後漢書なんかに出てくる王クラスの外交交渉ではない、もっと下位の、もちろん日常的な交換品というレベルではないと思えますけれども、中間的な第二階層くらいのレベルでの流通というものも考えておかなきゃいけない。長物だから魏志倭人伝をイメージして説明しますというものは避ける必要があるなど、遺跡のデータにきちんと即して議論する必要がある。思い込みすぎないことが必要だと感じました。

【君嶋】 ありがとうございます。ではそういう先入観を排除してですね、地域の刀あるいは剣の入り方を虚心坦懐に見て、資料事実からどういうことが言えるかと、この後各地域の皆さんにご報告・ご説明いただきたいと思えます。

今の話にもありましたけれども、古墳時代の始まり、前方後円墳の成立には、吉備、すなわち現在の岡山県の勢力が大きく関わっていたということが、埴輪とか土器の研究からもすでにわかってきております。これから、各地域の古墳の出現と刀剣類のあり方についてお話をうかがっていくのですけれども、弥生時

代は福岡県の城門さんにトップバッターをつとめていただきましたけれども、古墳時代のトップバッターは吉備代表の石田さんをお願いしたいと思います。

【石田】 それでは吉備の古墳時代の初めの状況について説明したいと思います。先ほどから、古墳時代の始まりというものに吉備が深く関わっていたという、そういったお話がありますけれども、ちょっと補足させていただきます。楯築墳丘墓で弥生時代後期後半に初めて使用され始めた吉備の特殊器台ですが、吉備の特殊器台の最も新しいタイプのものが、奈良県の桜井市箸墓古墳や天理市中山大塚古墳など、古墳時代初期の大和の前方後円墳からも出土しておりまして、そういったこともあって吉備の勢力がヤマト王権の成立、前方後円墳の成立に深く関わっていたのではないかという話が出てきております。中には吉備の勢力が東に移ってヤマト王権を作ったという説もありますけれども、私はそこまでは全く思ってませんが、少なくとも吉備の勢力がヤマト王権の成立、前方後円墳の成立に、関わっていたということは事実だと考えております。

吉備の古墳時代のはじめ、前期でも前葉になりますが、岡山市に浦間茶臼山古墳という前方後円墳が出現します。全長が約138mとかなり巨大で、奈良県の箸墓古墳のちょうど2分の1のサイズでつくられているのではないかとされておりまして、墳丘の復元図を示しておりますが、形も箸墓古墳によく似ていますし、前方部が三味線のバチのように開く、そういった形をしておりまして、古い前方後円墳の特徴をもっています。浦間茶臼山古墳ですが、岡山大学の近藤（義郎）先生を中心に発掘調査が行われておりまして、情報はありますが、明治時代に乱掘にあっておりまして、出土品に関しては正確な内容は、よく分からないところがあります。後円部に長さ約7mくらいの長大な竪穴式石室が築かれておりまして、その中から、右に実測図を示していますが、刀5本、剣少なくとも18本が出土しております。吉備、瀬戸内側では剣の副葬が主体だったのですが、ここで初めて刀が副葬品として加わり、少なくとも刀5本、剣18本以上ですので、多数副葬が確認できる例になります。その他に、中国鏡になりますけれども、細線式獣帯鏡片とか、銅鏃、鉄鏃、鉄製の鎌や斧といった農具など、豊富な副葬品がまとまって出土しており、注目されます。

(1)前方後円墳の登場と副葬刀剣類の変化 ②吉備

古墳時代前期前葉

◎岡山市浦間茶臼山古墳が出現。

- ・全長約138mの大型前方後円墳。
- ・刀5本、剣18本以上を多数副葬。
- ・細線式獣帯鏡片、銅鏃、鉄鏃、農具等出土。



2 浦間茶臼山古墳出土刀剣

1 浦間茶臼山古墳墳丘復元図

<図の出典>
1:宇垣匡雅1987『吉備の前期古墳—浦間茶臼山古墳の測量調査』『古代吉備』第9集を改変
2:近藤義郎・新納泉編1991『浦間茶臼山古墳』

続きまして、吉備の古墳時代の前期前半の情報を表にまとめております。先ほどの浦間茶臼山古墳や下の段の岡山市の備前車塚古墳などが早くに、古墳時代の前期前葉に出現してまいります。備前車塚古墳ですが、全長は48m程度の、前方後方墳であります。吉備では前方後円墳より前方後方墳はややランクは落ちますが、副葬刀剣類を見てもみますと剣の他に刀が加わっております。備前車塚古墳もだいぶ乱掘を受けているため、出土した刀剣類の正確な情報が分からないのですが、備前車塚古墳においても刀剣類の多数副葬があった可能性は高いと考えられます。

吉備の古墳時代前期前半の状況

古墳名	所在地	時期	墳丘形態	墳長(m)	中心埋葬	刀	剣	ヤリ	鉾	鏡	玉類	鏃	甲冑	農具	その他
浦間茶臼山古墳	岡山市	前期前葉	前方後円	138	竪穴式石室	5	18			○	○	○	○	○	特殊器台形埴輪
備前車塚古墳	岡山市	前期前葉	前方後方	48	竪穴式石室	1以上	1以上			○		○		○	三角縁神獣鏡 11
七つ埴1号墳	岡山市	前期前葉	前方後方	45	竪穴式石室	1	1		1	○	○			○	特殊器台形埴輪
用木4号墳第4主体	赤磐市	前期前葉	方	22	木棺?		1			○	○				
殿山11号墳第4主体	総社市	前期中葉	方	15	木棺	1	1				○			○	2体埋葬

- ・刀が加わり、多数副葬が認められる。
- ・墳丘規模や副葬品が飛躍的に発展する。
- ・中小規模墳(前方後方墳・方墳)は剣か刀1~2本の副葬で弥生時代の状況とあまり変わらない。

これらの浦間茶臼山古墳、備前車塚古墳は、吉備でも上位の首長の古墳になりますが、墳丘の規模・副葬品の種類や量を見ていただきますと、前段階の弥生時代の墳丘墓と比べてとても飛躍的に発展した内容となっております。これらが、吉備の前期前半の上位の首長墳の状況になります。

一方で、表の半分より下のほうになりますけれども、岡山市の七つ埴1号墳や赤磐市の用木4号墳、総社市の殿山11号墳といったような古墳を例に挙げておりますが、これらは中小規模の前方後方墳や方墳になります。こういった中小規模の古墳に副葬されます刀剣類は、刀は加わってくるのですが、剣か刀が1~2本、若しくは剣が1本だけというものも見られまして、先ほど紹介した上位の首長の古墳以外は、あまり弥生時代の状況と変わらないような様相になっております。表には載せておりませんが、古墳時代の前期後半になっても、中小規模墳については同じような状況で、刀剣類の多数副葬も見られませんが、量も入ってこないよう

です。

以上のように吉備では、古墳時代のはじめから上位の首長の古墳では、かなり畿内の様相に近い古墳というものが出現してまいります。副葬刀剣類の状況を見ますと、多数副葬など、畿内中枢部の、奈良県天理市黒塚古墳のような、初期の古墳に近い様相を示しているのではないかと考えられます。以上が、吉備の古墳時代前期の状況になります。

【君嶋】 やはりですね、岡山県というよりも吉備といったほうがこの時代を語るときはしっくりきますよね。この後は岡山県の石田さんではなくて、吉備の石田さんということで通させていただきたいと思います。前方後円墳に副葬された刀剣が弥生時代から大きく変わっているということがよくわかりました。

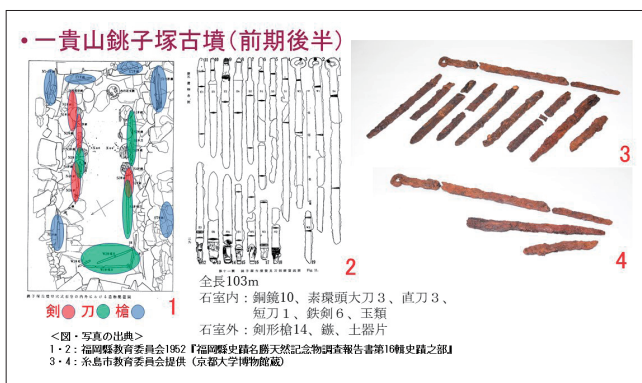
さて、北部九州はですね、弥生時代には対外交流の窓口でありまして、列島で最先端の鍛冶の技術も持っておりまして、列島内で刀剣類がかなり普及していた地域というお話がありましたけれども、城門さん、古墳時代になりますとどうでしょうか。

【城門】 北部九州の古墳時代に入る前にいったん戻って、弥生時代の後期後半、平原遺跡の状況から見ていきたいと思います。基本的に先ほども図面が出ていますけれども、銅鏡が40面出ておりまして、赤い部分に素環頭の大刀、長さ80cmほどの大刀が1本出ている

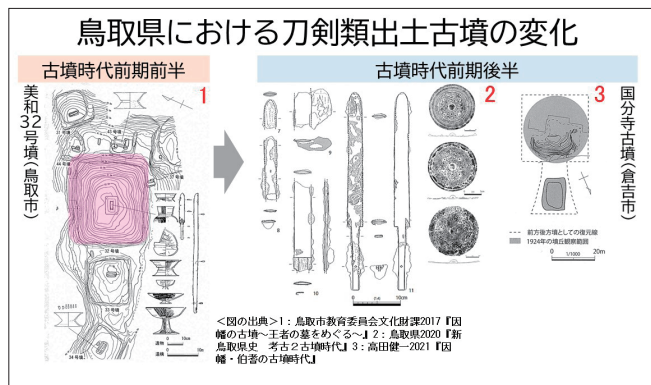
という状況になっております。古墳時代前期前半になりまして、苅田町、福岡県の東にあり、瀬戸内海に面する位置にあるんですけども、畿内の影響をかなり強く受けた石塚山古墳という首長墓でも、盗掘等を受けているので、鏡7枚と素環頭の大刀が1本以上ということにはなるんですが、そういった形で、基本的には弥生時代の後期から、トップクラスの首長についても、基本的には大きな変化がなかなか見られないという状況になっています。なので、古墳時代前期前半までは基本的な副葬品の構成における刀剣類の位置付けというのがほとんど変わらないのかなと考えております。じゃあ、いつ変わるんですか？という話になってきますけれども、一つ事例としてあるのは前期の後半、糸島市の一貴山銚子塚古墳ですけども、こういったところになりまして、青で示したものがヤリ、緑で示しているものが刀、赤で示しているものが剣になりますが、石室の中からは銅鏡10面と素環頭大刀が3、直刀3、短刀1、鉄剣6で、石室の外からはヤリが14といった形で、大量副葬の事例というのがここで初めて見られるようになってきます。ただ、ちょっと一部先ほど石川先生の話を聞きながら思ったのは、盗掘を受けているものについても、特に古い時代に調査されたものに関しては、おそらく鉄刀や鉄剣が出てきても、茶色い汚い破片だなあという形で捨てられるというのが往々にしてありうると思うので、その辺をどう考えていくのかというのは考えなければならない課題としては残っているかなとは思っています。

【君嶋】 前方後円墳の登場は吉備と同様に早いんですけども、刀剣類が変化するのは前期後半になってからということですね。少し意外に思いながら聞いておりました。

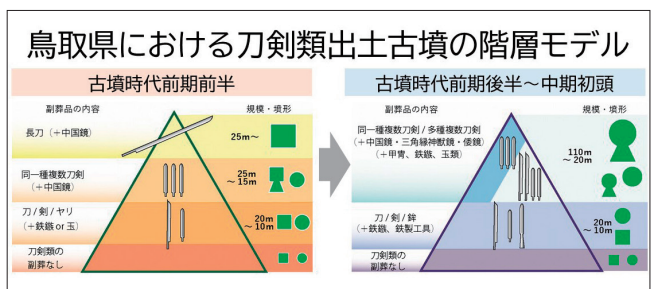
さて、続きまして、日本海側ですが、私は、本来は鳥取県の代表としてここに来ておりますので、ここで山陰の様相をご説明いたしますと、古墳時代前期前半に鳥取県ではまだ前方後円墳というのはなくて、弥生時代の墳丘墓と同様、方形の墓、方墳が造られ続けます。



この図(右図)は、前期前半では鳥取県内では最大規模の方墳であります美和32号墳という古墳ですが、このように長大な刀が出土しております。この古墳は、四角いというだけでなく、埋葬施設が木棺でありますことや、あるいは土器を使った葬送儀礼のやり方など、いろいろな点で弥生時代の墳丘墓と共通した特徴を持っています。加えて、前半でお話ししましたように、弥生時代の鳥取県あるいは山陰の墳丘墓には環頭部を裁断した長大な大刀が副葬されていたということを思い出しますと、実は鳥取県では古墳時代になったといっても、四角い古墳そのものも、長大な刀そのものも実は弥生時代とあまり変わらなかった、最有力首長の権威の象徴として大刀を尊ぶ弥生時代的な価値観が続いていたのではないかというふうには考えております。ただ、ヤリが副葬されているのは新しい特徴として、新時代の波が確実に当地域に及んでいたとは言えるわけです。



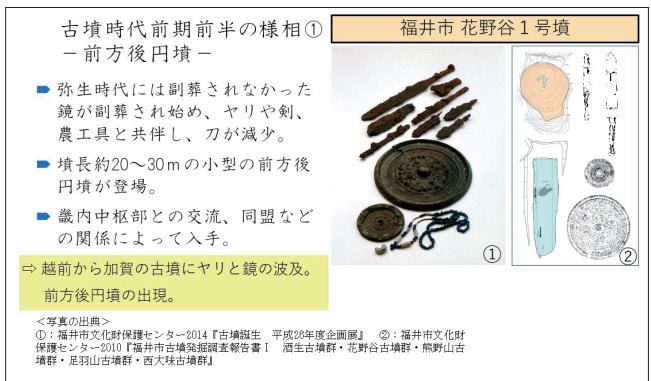
こうした様相が変わってくるのが前期の後半になってからでありまして、倉吉市の国分寺古墳という古墳は、墳丘の残りがよくないので、前方後円墳なのか前方後方墳なのかちょっとよくわかっていないのですが、刀2点、剣1点、ヤリ2点、計5点の刀剣類が副葬されていました。その他にも三角縁神獣鏡を含む鏡が3点、鉄製工具など豊富な副葬品が出土しています。



このように、前期後半の前方後円墳の出現とともに、刀、剣、ヤリといった異なる種類の刀剣を組み合わせて、複数点副葬するあり方が登場します。先ほどの吉備とかと比べますと点数的には10何点という点数ではなく、5・6点ですね、古墳時代の前期の終わりころから中期の初めにかけて、鳥取県では90mとか100mクラスの大規模前方後円墳が築かれてくるんですけど、これらの古墳に5点とか6点といった刀や剣が副葬されてきます。一方で中小規模の古墳では刀か剣1点のみという例が多くて、墳丘規模と副葬品の質、量の較差がはっきりしてきます。岡山県では前期前半からみられました、こういった大規模前方後円墳を中心とする秩序といったものが、前期中頃から中期はじめにかけて、鳥取県に徐々に波及して来たということが刀剣類から窺えるのではないかと考えております。

続いて北陸地方ですけれども、三原さん、いかがでしょうか。

【三原】古墳時代に入りまして、北陸のほうでは変わった点として、刀剣から離れてしまうのですが、鏡の副葬の開始が挙げられます。前期前半頃までに越前〜能登の前方後円墳に鏡が副葬されます。福井市の花野谷1号墳というところの写真を挙げておりますけれども、三角縁神獣鏡と連弧文銘帯鏡という鏡が入っております。先ほどの君嶋さんの話にもございましたけれども、ヤリが入っております、弥生時代にはヤリが本格的には見られなかったものが、この段階から、古墳時代前期前半段階からヤリが入ってきてまして、畿内のほうでもヤリが増えてきた中で、北陸のほうにもそういった畿内の波が入ってきている状況がございます。先ほど、乃木山墳丘墓ですとか原目山墳丘墓でもあげましたが、豊富な刀が北陸の特徴だったのですが、刀が福井の場合はほとんど副葬されなくなってくるような状況も弥生時代と大きく変わってきています。



一方ですね、花野谷1号墳が出現する時期、前期前半の時期なんですけど、金沢市の神谷内17号墳というところに、墳丘長12mの小さな方墳がございます。先ほど君嶋さんのほうからもお話がありましたけれども、

古墳時代前期前半の様相②
—方墳—

- 前方後円墳が出現する時期にも方墳が存在。
- 素環頭大刀（環頭部裁断）を重視する副葬品組成の残存。

⇒ 地域により古墳時代への変化は一様ではない。

<写真の出典>
①・②：金沢市埋蔵文化財センター2004『神谷内古墳群』

金沢市 神谷内17号墳




● 墳丘長12mの方墳
● 全長77.1cm、刃部幅5.8cm
● 環頭部裁断か

DATA

古墳時代前期後半の様相
—多数副葬の事例—

- 前期後半に刀剣類の同種多量副葬が始まる。
- 墳丘長64mの前方後方墳。
- 刀5点、剣16点のほか、方形板革綴短甲、車輪石、工具、玉類などを副葬。

⇒ 首長層に多数副葬。
墳丘の大型化。畿内中核部からの配布。

<写真の出典>
①・②：石川県立博物館2018『加賀・能登・王墓の世界』
③：真西町教育委員会2006『史跡 雨の宮古墳群』

中能登町 雨の宮1号墳



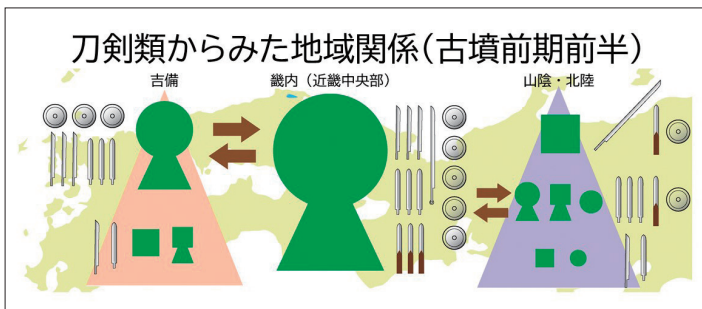


直刀が1振り出ておりまして、こういった小さな方墳なのですが、弥生時代の副葬品のもちかたですね、自分たちの社会秩序を維持しようといいますが、古い伝統を残していくような古墳も存在しておりまして、前期前半は地域によって少しまだらな状況というのが見えてきます。

前期後半に入ってきますと、先ほど石田さんからお話があったように多数副葬というのがみられます。石川県中能登町の雨の宮1号墳、64mの前方後方墳になりますけれども、富山県の氷見市阿尾島田A1号墳、これは前方後円墳ですけれども、そういったところに同種の刀ですとか剣を多数副葬するという事例が出てきます。雨の宮1号墳ですと刀5点、剣16点ですとか、多量の副葬品も持っています。自分が身につける以上のものを副葬する、他の古墳の副葬品との差が、一段と明瞭になってきます。先ほども申し上げましたが、墳丘の大きさですね、他の古墳よりも一段と大きくなっていくというような状況がございまして、こういった様相も弥生時代と古墳時代を分ける大きな指標となっております。

【君嶋】 方墳に長大な大刀が副葬されるという北陸地方の状況は、山陰地方とたいへんよく似ているなど思いながら聞いておりました。また、北陸の前方後方墳は、前方後円墳と遜色ない埋葬施設や副葬品をもっているということでしたけれども、先ほどの吉備では、前方後円墳と前方後方墳に少々ランクの差があるようなお話でしたので、こういった墳丘の違いが何を意味するかというのは、地域によって濃淡がありそうな気がします。

ここまで、瀬戸内側の吉備、それから北部九州、日本海側の山陰・北陸それぞれの地域で、古墳、特に前方後円墳・前方後方墳がいつ頃登場したか、刀剣のあり方がそれによってどのように変わったか、あるいは変わらなかったかという点についてお話を伺ってきました。弥生時代と古墳時代との刀剣の違いについても明らかになってきたように思いますので、この辺でちょっと整理してみたいと思います。



まず、副葬された刀剣類の様相が変わった時期については、決して古墳時代になって一斉に変わったわけではないというお話だったかと思います。古墳時代前期を便宜的に前半と後半に分けますと、前半に変化が起こったのが吉備、後半に起こったのが残りの北部九州、山陰・北陸の日本海側ということになります。それからもう一点、各地域で、副葬刀剣の様相が変わった古墳と、変わらなかった古墳があるというお話がありま

した。吉備では、前方後円墳である浦間茶臼山古墳で刀剣の「多数副葬」が行われていまして、弥生時代から劇的に刀剣の在り方が変化したものの、中小規模の前方後方墳や方墳などでは、刀や剣1点のみの副葬が多く弥生時代とあまり変わっていないということでした。一方、山陰・北陸は、前期前半にはまだ大型の前方後円墳が登場していない地域です。この地域では、最有力の首長は弥生時代以来の伝統を受け継ぐ方墳に葬られておりまして、副葬された刀も、これまた弥生時代と変わらないような長大な大刀を副葬しておりました。むしろ、小規模な前方後円墳や前方後方墳・円墳の被葬者といった方が、新しい武器であるヤリですとかあるいは複数の刀剣を持っていたりなど、新しいあり方を取り入れているという、吉備とはいわば真逆の様相を示しているということです。もっとも、墳丘規模を度外視しまして、古墳の形のみに注目すれば、いずれの地域においても、刀剣類の変化、すなわち副葬される種類が増え、数が増えるという変化は、前方後円墳や前方後方墳で起こっている、そういう点では共通しているということが言えるかと思います。このことからですね、刀剣類の変化は、前方後円墳をシンボルとする畿内王権との結び

多数副葬墳の増加（古墳時代前期前半）

・岡山県～近畿中央部に分布集中・素環頭大刀
 ※大陸製「軍装」備えた有力者の存在



では、刀剣の多数副葬が開始されます。京都府与謝野町の大風呂南1号墓は、観光地として名高い「天橋立」で閉ざされました阿蘇海（あそかい）と呼ばれます潟湖の奥地、阿蘇海を臨む丘陵上に築かれております。墳丘の規模は、長辺27m、中心埋葬となる画像で示した第一埋葬部の木棺の中からは、多数の刀剣を含む副葬品が見つかりました。中央の図をみていただくと分かりますように、網掛けで示した被葬者の周囲を取り囲むように武器や、銅釧などの腕飾りが配置され、刀剣は比較的長い2本と、頭部付近に9本もの短剣が見つかりました。

多数副葬墳の拡散（古墳時代前期後半）

・列島各地の有力古墳で多数の刀剣を含む豊富な副葬品がみられる
 ※前方後円墳中心の政治的秩序が広く拡散



続く古墳時代前期前半には、古墳の出現と対応して、鉄製刀剣の多数副葬古墳が大きく増加します。多数副葬古墳の分布は、図をみてもらいますとわかるように、弥生時代と比べて大きな違いが認められ、弥生時代後期まで刀剣副葬が多くみられた北部九州や、日本海沿岸域ではなく、弥生時代の副葬刀剣が少なかった近畿中央部や岡山県域、吉備にかけての地域で、集中してみられます。この時期には、北近畿や瀬戸内地域で副葬の主体であつた“剣”が継続してみられるとともに、新たな器種として“ヤリ”、そして弥生時代の北部九州や日本海沿岸域で多くみられた“素環頭大刀”や“直刀”が刀剣構成に加わりまして、墳墓あたりの出土点数も大幅に増加していきます。この刀剣の多数副葬古墳は、同時期の古墳の中で、大規模な前方後円墳と前方後方墳にほぼ限定され、なかでも墳丘規模が100m近いものや、さらに大規模な古墳、画像で示した奈良県の黒塚古墳のような古墳で、こちらのような“素環頭大刀”や、小さな短冊状の鉄板を革紐で組み合わせる、復元図で示した“小札革綴冑”など、中国大陸で製作された武器・武具が特徴的に出土しておりまして、中国系の「軍装」を備えた有力者が、刀剣の大量副葬の主体となったことを推測できます。

そして、古墳時代前期後半には、刀剣を多数副葬する古墳の分布範囲がさらに大きく広がりまして、列島各地の有力古墳、各地域内で規模の卓越した古墳に、石川県中能登町の雨の宮1号墳のような、多数の刀剣を含む豊富な副葬品構成がみられるようになります。これらの古墳には刀剣の他に、銅鏡や石製の装身具、鉄鏃や銅鏃、鉄製農具など、地域を超えて共通する副葬品構成が確認でき、古墳時代前期後半には、図で示したような前方後円墳を中心とする「畿內的」な政治秩序や体制が列島各地に拡散したことを示すものと考えられます。

【君嶋】 丹後半島の大風呂南1号墓のご説明がありましたけれども、今回の講演会でですね、14県によります、古代歴史文化協議会の成果発表ということですが、残念ながら14県の中に京都府が入っていないということで、いや、日本海側の鉄器、鉄製武器の話をするのに丹後半島がすっぱり抜けたらちょっと話にならないな、どうしようかなと打ち合わせの段階で色々ともめていたんですが、そこはさすが林さん、日本海側全般に精通しておられる林さんにまとめていただきまして、本当に助かったなと思っております。

多数副葬というありかたが古墳時代前期後半に前方後円墳秩序と共に広がっていくという先ほどのモデルが全国的に見ても当てはまりそうだとことをまとめていただきました。弥生時代には交易をバックグラウンドとした地域間の結びつきによって、分布の偏りを示しつつも列島各地に広がり、各地域の有力者たちの腰を飾ってきた刀剣類なんですけれども、古墳時代には畿内王権と各地域の有力者との結びつきによってもたらされ、身に帯びることもあったかもしれませんが、やはりたくさん持っているということがステータスを示す存在になったと、そういう変化をたどることができたのではないかと思います。それともう一つですね、刀剣そのものが古墳時代になってどのように変わったのかという点につきましては、素環頭大刀に代わって直刀が主流となること、ヤリという新しい武器が登場することに加えまして、前半で三原さんからご説明のありました「落とし込み式の把」ですね、これが、古墳時代には列島の広い範囲に広まって、齊一化・定型化したというお話もここで思い出していただければと思います。

さて、弥生時代の中期、おおよそ紀元前2世紀ですかね、日本列島に鉄製刀剣類が伝わってから、おおよそ紀元後の3世紀から4世紀、前方後円墳が登場して、列島各地に刀剣類が広まり副葬される古墳時代前期までの、おおよそ500年、600年近くにわたる鉄製刀剣類の歴史をたどってまいりましたけれども、終わりの時間が近づいてきました。最後に、今日の議論を振り返ってですね、石川先生にまとめのコメントを、できれば逆襲なしでお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

【石川】 それにしても難しいですね、相変わらず。やっぱり一番今日の議論を伺って思うのは、最後の君嶋さんがまとめてくださった古墳時代になっても、前期前半では畿内を上位とし、また吉備がこれに連携しているとしても、しかしそれ以外の九州でさえ、前代以来の伝統といいますか特色をかなり残している。古墳の規格や大きさやあるいは竪穴式石室、石槨、埋葬施設や鏡の多数副葬傾向、こういった従来から議論されてきた部分では確かに一気に転換したように見えるんだけど、刀剣に重点を置いてみたときにだいぶ様子が違うということを描き出してくださって、そしてそれが広域にわたって横並びではないですが、階級的構造を持ちながらも九州から中部地方の一部まで、いや関東、場合によると東北南部まで含めてそういう構造ができるのは前期後半なのであるという、大括りですが非常にわかりやすく、しかも大きな結論といますか、描き出したものだと思うんですね。しかも従来繰り返しています、中国鏡を中心として、いえ三角縁神獣鏡を中心としてといってもよいかもしれません、で描き出した。それからそのモデルとしては魏志倭人伝の魏の中樞が親魏倭王に諸々の好物＝優れたものを与えるのは、ただプレゼントするだけではなくて、お前のバックに魏がいるのだということ、さらにそれを親魏倭王として卑弥呼、あまり卑弥呼という話は出しちゃいけないのかな、倭国王をそれを支持しているということを倭人の世界に知らしめようというそういう趣旨から出ているんですね。そういう魏と倭王との関係を、倭王と地方との関係に三角縁神獣鏡を通して、類似構造を見出して、古墳時代社会の出現というのを描き出しているように見えるんですね。ざっくり言っちゃうと。刀剣から見るとだいぶ様子が違うんじゃないでしょうかということが、今日ものすごく強く示されたのがとても面白かった、重要だと思います。



そこに、私が触れた部分をあえて結びつくとすれば、前期前半の畿内中樞で吉備が関連して作り上げた、林さんは「軍装」を備えた軍備、武器で身を固めた王と言っていますが、こういうものの仕組みというか、そういうステータスというか、そういうものが出来た背景としては、小林行雄先生を批判しながらいうわけではないのですが、五尺刀、銅鏡100枚とが気になりますね。やはり、別の見方をすると鏡だけで議論してきたのだけれども、やはり長物の刀プラス五尺刀、場合によると剣を含んでいる可能性が無いとは言いきれませんが、長物の武器というものもセットで取り入れるというのは畿内だけで発想できるはずもないので、やはりアジアレベルで、議論は難しいですが、考える必要があるのかなということを感じました。ものすごくおもしろかったです。そうだとするとその前代に刀剣から見ても、大陸側とあれだけ密に交渉していた北部九州が、やはりだいぶ様子が変わってしまうというのは、なんか岡村秀典さんの中国鏡の6期から7期の分布の劇的な変化の中に、重大な歴史的事実を求めようとしたものどこか通じる部分があって、刀剣面白いですね。

私、錆びない青物（青銅器）が大好きなんですけれども、錆び物はあまり好きじゃなかったんですけども、今日お話を聞いて、これはこの時代を語るにはやはり、特に長物は重要だなということを改めて認識をもちました。印象を改めました。本当にありがとうございます。

【君嶋】 ありがとうございます。確かに今回テーマとしております、鉄製刀剣類はなかなか状態のよい物が少なく、写真と並べても、錆びた茶色のコロッケか唐揚げみたいなものが並んでですね、この後展覧会という形での情報発信も考えているんですけども、前回は玉という研究テーマで、展覧会拝見しますと本当に展示ケースに色とりどりの玉が並んでですね、非常に見ても楽しい展示だったんですけども、さあ刀剣の展示はどうしようということで、城門さんが頭を悩ませているところなんです、古墳時代



後期は金ぴかの装飾大刀といったものがたくさんあって、これはこれで写真映えするのですが、私も前期をテーマにしますとなかなかそういった、木製装具はあるんですけども、キラキラしたものはなく、一番多いのは錆びてしまった鉄の塊ということで、なかなか見栄えという点では苦しいものがあると思うのですが、石川先生からございましたように・・・

【石川】 君嶋さんごめんなさい。まとめている途中で口挟んで。現在はそうだけれども、錆びて装具も朽ち果てているんだけど、当時最大級の装具を備えて、しかも抜けば錆びていない。ですから、考古学者は当時を描くので、目の前が錆びているとしても、私たちの目はその錆びを乗り越してやはり、当時の姿を描き出すということですよ。

【君嶋】 失礼いたしました。我々、ものを見る目を錆びさせてはいけないということですね。ありがとうございます。では、パネリストの皆さんからも、今日の感想、今後の研究の展望など、一言ずつお願いしたいと思います。それでは福岡の城門さんからどうぞ。

【城門】 今日の話聞きながら、いつまでたっても青物が好きな北部九州だなあというところで。個人的には刀剣という以上、なかなか古墳時代に入ってくると階層性とかそういったところが、話の中心にはなってくるんですけども、やはり第一義的には武器という側面があるので、そういったところの、最後にちょっと話が出た軍事といったところがどういった形で変化していくのか、弥生時代から古墳時代で変化してくるのかなといったところもこれを基盤としながら、今後取り組んでいけたらなと思っています。本日はありがとうございました。



【君嶋】 吉備の石田さん。

【石田】 吉備の石田です。本日のこの講演会の収録は、各県の皆さんに吉備にお越しいただいて行っております。岡山は瀬戸内海に面しており、四国や山陰への交通の便も良く、北部九州や畿内との交流も、昔の吉備の時代から盛んで、そういったものが今日報告いたしました、刀剣類の様相にも出ているのではないかと感じています。また、この14県の研究対象からは外れますが、岡山は平安時代後期以降になりますけれども、「日本刀」の一大生産地で、備前長船など「備前刀」でも有名な地域であります。今回14県で集成を行いました、弥生時代から古墳時代の刀剣類の資料も多く、岡山で1,000点くらいがあがっています。今日の講演会は、古墳時代の前期までが対象でしたが、古墳時代中期以降、後期の刀剣類にも注目できるような資料、金ぴかの資料もありますので、この14県での取り組みを機に、岡山県内の刀剣研究ですが、まだまだやる余地があると思っておりますので、進めて行ければと思っております。本日は、どうもありがとうございました。



【三原】 普段、私は発掘調査を仕事で行っておりますけれども、鉄製品とか刀ですとかそういったものに出会う機会はほぼないという、発掘したのは1件くらいしか今まで経験の中でないという状況で、鉄製品とか刀とか敬遠してたといいますか、あまり見ていなかった状態だったのですが、弥生時代の福井の墳丘墓の例を見てますと、刀ですとかも列島規模で見ても誇れるような資料があるということが今回の中で分かってきたのかなと。舶載品はどうやって福井のほうへ入ってきたのかなというところが、すごいまだ解けないんでしょうけれど、興味関心が高くなったところです。また、そういったところも今後研究続けて詰めていければいいなという風に考えております。本日はありがとうございました。



【林】 石川県は今回の協議会で刀剣を集成した結果、古墳時代の刀剣が実は14県の中でも少ない県だということが浮き彫りになったのですが、他県でも多く見られる墳墓に副葬された刀剣に加えて、集落から刀剣、

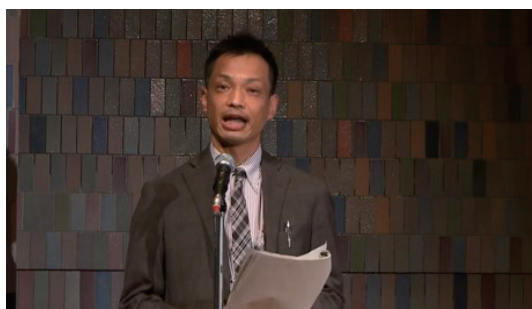
刀剣装具の双方がまとまって見つかる地域というのは限定されます。石川県は、協議会のなかで墳墓と集落の関係に迫れる限られた地域なのかもしれないということに気付く良い機会となりました。この協議会では14県を代表して、さらにこの問題を掘り下げていきたいなと思います。



【君嶋】 各県から今後の研究の展望について力強い発言をいただきました。

ここまで拙い進行でお聞き苦しいところも多々あったかと思いますが、石川先生、それからパネリストの皆さんのおかげでなんとかまとめることができました。パネルディスカッション「刀剣が語る古墳時代の幕開け」以上で終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【司会：宮地】 ありがとうございました。古代歴史文化協議会の共同研究事業は、ただいま、現在進行形で取り組んでいるところでして、本日の講演会も中間成果発表ということになります。次の講演会も含め研究成果の発信に引き続き取り組んでまいりますので、今後とも当協議会の活動にご注目いただければと思います。今回はこのような形での講演会になりましたが、会場の岡山県立美術館ならびに関係者の皆様に御礼申し上げます。それでは、これもちまして、第5回古代歴史文化講演会を終了いたします。どうもありがとうございました。



司会：宮地聡一郎（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）



表 「刀剣が語る古墳時代の幕開け」 関連年表

西暦	時代	日本列島での主な出来事 (刀剣類)	(講演で登場した遺跡)	朝鮮半島 (刀剣類と関連遺跡)	中国大陸 (関連遺跡)
BC300	弥生前期	稲作農耕が伝わる (金属製武器の導入 北部九州で墳墓への副葬はじまる)		青銅器時代	戦国
		金属器・ガラス加工の開始 (鉄製品の導入 墳墓への副葬はじまる) (素環頭大刀、鉄剣の普及 鉄戈、鉄鉾の一時的導入)	福岡県・吉武高木遺跡 福岡県・須玖遺跡群 福岡県・吉武樋渡墳丘墓 福岡県・三雲南小路遺跡 福岡県・立岩遺跡 福岡県・井原窪溝遺跡 鳥取県・青谷上寺地遺跡 鳥取県・中尾遺跡 石川県・八日市地方遺跡 香川県・心経山遺跡 兵庫県・有鼻遺跡 京都府・奈良谷遺跡	初期鉄器時代 忠清南道・松菊里遺跡	
AD1	弥生中期	鉄製品の本格的普及 後漢光武帝より「漢委奴国王」金印を賜る(57)	佐賀県・桜馬場遺跡 佐賀県・三津永田遺跡 鳥取県・松原1号墳 大阪府・大竹西遺跡 福岡県・西山公園遺跡 岡山県・百間川原尾島遺跡	原三国時代 金海市・良洞里遺跡	秦 前漢 南越王墓 海城漢墓
		弥生後期 (直刀の出現)	長野県・根塚遺跡 石川県・白江梯川遺跡 新潟県・山元遺跡 福岡県・向山B遺跡 鳥取県・宮内第1遺跡 岡山県・楯築墳丘墓 島根県・西谷3号墓 福岡県・小羽山30号墓 京都府・大風呂南墳墓群 福岡県・上町向原遺跡 福岡県・平原遺跡 福岡県・徳永川ノ上遺跡 福岡県・汐井掛遺跡 岡山県・女男岩墳丘墓 島根県・宮山IV号墓 福岡県・原目山墳墓群 福岡県・乃木山墳丘墓 富山県・杉谷A遺跡	新	後漢
200	(弥生終末期)	(ヤリの出現)		公孫康、帯方郡を設置	
300	古墳前期	卑弥呼、魏へ遣使(239) 前方後円墳の出現	奈良県・ホケノ山古墳 奈良県・箸墓古墳 奈良県・中山大塚古墳 奈良県・黒塚古墳 福岡県・石塚山古墳 岡山県・浦閩茶臼山古墳 岡山県・備前車塚古墳 岡山県・七ツ丸1号墳 岡山県・用木4号墳 岡山県・殿山11号墳 鳥取県・美和32号墳 福岡県・花野谷1号墳 石川県・神谷内17号墳 奈良県・メスリ山古墳 石川県・千代・能美遺跡	三国時代	三国時代
		弥生後期 (ヤリの出現)	高句麗、楽浪・帯方郡を滅ぼす(313)	晋	
400	中古期墳	百舌鳥・古市古墳群で巨大古墳の造営はじまる	奈良県・一貴山銚子塚古墳 奈良県・東大寺山古墳 鳥取県・園分寺古墳 富山県・阿尾島田A1号墳 石川県・雨の宮1号墳	百濟近肖古王、倭に七支刀を贈る(369)	五胡十六国時代
			倭、新羅に侵入するが高句麗に撃退される(391～404)		

第5回 古代歴史文化講演会 講演録

発行年月 令和4年3月

編集 古代歴史文化協議会事務局（福岡県教育庁教育総務部文化財保護課）
〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7
TEL：092-643-3876 FAX：092-643-3878

発行 古代歴史文化協議会 <http://kodairekibunkyo.jp/>

